

# 東京都心部における駅空間の分析と設計

Y10005-8 池田 七瀬

指導教員 前田 英寿

## 1. 研究背景と目的

駅が大きく変わろうとしている。駅ナカ商業や公益施設の導入により単なる交通施設だった駅が都市空間に変わっている。一方で未だ変わらぬままの駅が東京都心に存在しているのも事実である。毎日大量の人が行き交う東京都心の駅には都市環境を革新するポテンシャルがある。このような現状を踏まえ、本研究では東京都心においてこれからの駅のあり方を分析と設計を通して探ることを目的とする。

## 2. 事例調査

東京都心の駅を実際に訪れ調査した。JR線、東急線のうちの14駅を現地調査するとともに駅の周辺空間を観察した。駅の空間的特徴をパターンとして抽出しダイアグラムを作成した。それぞれのパターンごとにホームまでのアプローチ、人・車の動線確保、周辺空間の活用用途、駅空間の認識の4つの視点から分析を行い、地下化、高架化駅、施設（駅ナカ、駅ビル等）の付設された駅を調査し、過去と近年計画されているものをそれぞれ分析し傾向を調べた。

表1 調査駅一覧

駅名	線路	駅施設	駅の変遷	乗降者数	
地下駅	用賀駅	地下	オフィスビル、駅ビル	1993年 駅ビル建設、北口	80732
	大岡山駅	地下	病院	1997年 地下化 病院建設	45233
	四谷駅	地下	コンビニ、駅ビル	2011年 駅改良工事	33232
地上駅	駒込駅	地上	コンビニ		17268
	尾山台駅	地上			27255
	駒込駅	地上	コンビニ	2006年 駅舎改良工事	17268
	上野毛駅	地下	コンビニ	2010年 駅舎立て替え	20830
	等々力駅	地上		地下化計画	13107
高架駅	大塚駅	高架	複合施設建設予定	駅複合施設の建設計画	51851
	駒込駅	地上		2006年 駅舎改良工事	17268
	自由が丘駅	地上、高架	駅ナカ商業施設、コンビニ	2005年 駅改良工事	139665
	新大久保駅	高架	コンビニ		42433
	田端駅	地上	駅ビル、駅ナカ商業施設、コンビニ	2006年 北口建て替え工事	43129
	二子玉川駅	高架	駅ビル、駅ナカ商業施設、コンビニ	2000年 改良工事	121299
	溝の口駅	高架	コンビニ	デッキ整備 複線化工事	86767
	目白駅	地上	駅内販売施設		37355
	四谷駅	地上	コンビニ、駅ビル	2011年 駅改良工事	88104

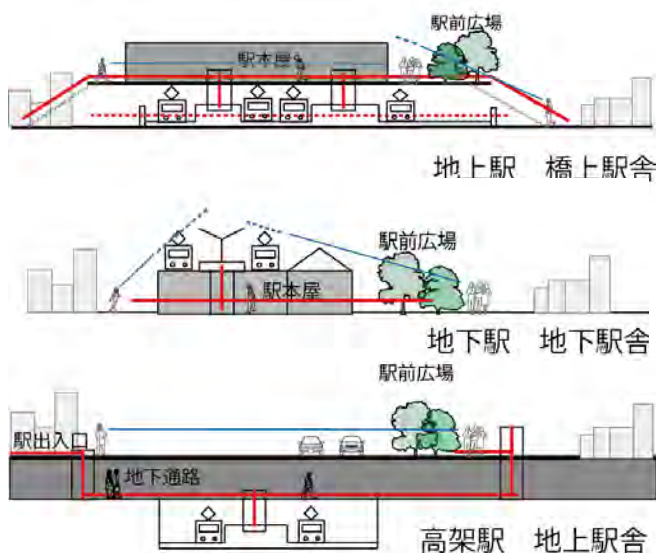


図1 駅空間のダイアグラム

## (1) 東京都心駅の現状

ターミナルの多い海外の駅と比較して、日本では通過駅が多い。さらに東京という過密都市において車などの道路交通を妨げることなく、最小限の空間で一日あたり数十万人をスムーズに誘導することが求められ、ほとんどの駅舎は高架もしくは地下化されている。高架駅は街の中の視界を遮り、薄暗い高架下の空間を生み出している。近年では地下化も増えている(小田急線、京王線、東急線等)。地下化駅は最小限の交通機能しか持たない例がほとんどである。

## (2) 駅の立て替え前後の用途の変遷

建て替え工事が行われた駅の変化を調査した。近年の傾向としては駅ナカ商業施設にみられるように動線重視の流動的な空間から人を留まらせる空間へ変化しているという点である。駅舎を歴史的空間として継承するよう、復元やコンバージョンの例も多い。

## 3. 四ツ谷駅

東京四ツ谷駅を設計対象敷地とする。

### (1) 概要

四ツ谷駅はJR中央線、総武線、東京メトロ丸ノ内線、南北線が乗り入れ、各主要駅へのハブ駅としての機能を果たしている。江戸城外濠にあるため線路を挟み両側のレベルが高い独特な地形の中に位置する。山手線の地上駅、丸ノ内線の高架駅、南北線の地下駅と3次元に展開する駅である。

### (2) 四ツ谷周辺の歴史

江戸時代に江戸城とともに外濠が建設され、城内外の境界となった。甲州街道の要衝の地として四ツ谷御門が造られ、濠の内外をつなぐ場となった。現在は四ツ谷御門を挟むように四ツ谷駅があり、濠に沿って線路が敷かれている(図2)。



図2 四ツ谷駅周辺の古地図と現在の線路、駅の重ね合わせ

### (3) 四ツ谷駅の歴史

四ツ谷駅は明治27年に甲武鉄道の駅として開業した。地下鉄丸ノ内線の駅は昭和34年、南北線の駅は平成8年3月26日に開業した。昭和62年建て替え工事が行なわれ、同時に四谷見附橋の付け替え、平成2年駅ビル(アトレ四谷)が建設された。

### 3. 四ツ谷駅の設計計画

本研究では濠の底部をB2Fと定義し、B1F,1Fと3フロアの平面図、断面図を作成しながら現状の四ツ谷駅の空間分析を行った。

#### (1) 設計の課題

かつて要衝な地であった四ツ谷の外濠空間は市民利用に乏しい。さらに四谷駅周辺の掘割地形の作り出す景観は視線を遮る要素がないため遠くまで視線が通る空間を形成している(写真1)がこの空間の中を跨ぐようにして建設された駅ビルにより景観が分断されている(写真2)。



写真1 四ツ谷駅からの景観

写真2 アトレ四ツ谷

また、乗り換え時に一度道路を横断する必要がある箇所が存在するため安全面や移動効率を考慮する必要がある。

#### (2) 設計の方針と計画

①外濠及び四ツ谷の地形、緑、歴史を現代的に復元する。

新しい要素(商業施設)を地下空間へと広げ、地上空間はかつての緑の多い濠の景観に戻す。(図3)

また、活用される機会が少なかった濠内の空間に広場を設けることで利用価値を与える。

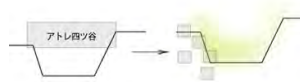


図3 アトレ再配置計画



設計のイメージ図

②都心駅にふさわしい移動空間に再編する

①によって生まれた地上と地下の対比の空間の中で人の動線を上下に振り分けながら乗り換えを改善し、スムーズな人の流れを作る(図4)。

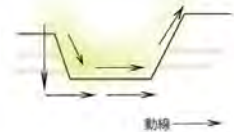


図4 動線計画

③ 周辺の動線を導き、歴史的な遺構を見える化する。

個性が希薄な都市の駅空間に周辺環境を取り込み、その場所ならではの空間を生み出すことでこれからの駅空間を提案する(図5)。

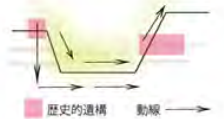


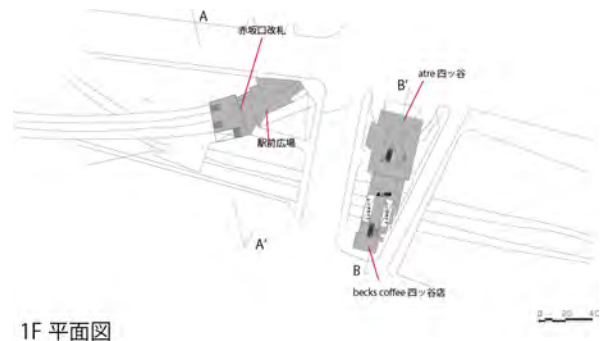
図5 周辺環境と動線の駅空間を提案する(図5)

### 4. 結語

四ツ谷駅を例にその場所の歴史、自然を踏まえた駅空間ならびに駅動線を提案した。本提案をきっかけにこれからの都心の駅空間がより豊かになることを願う。

#### 参考文献

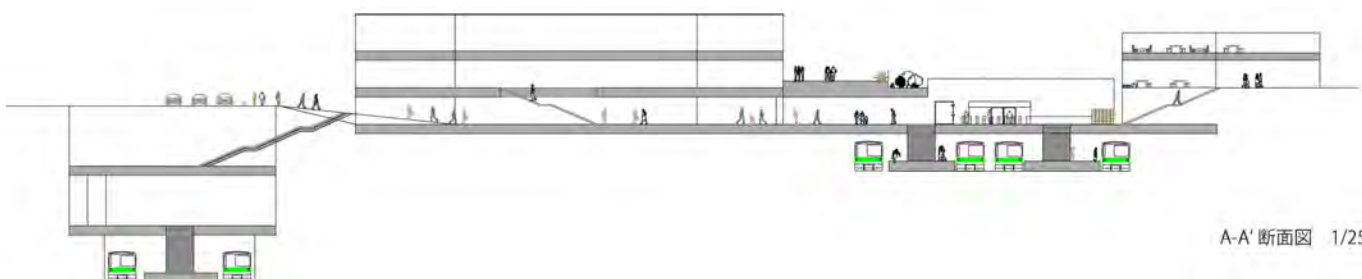
- [1] 鹿島光一: 駅再生 スペースデザインの可能性, 鹿島出版会,2002
- [2] 池波正太郎;江戸古地図散歩, コロナブックス,2001
- [3] 鹿島光一:外濠 江戸東京の水回廊,鹿島出版会,2012



1F 平面図



A-A' 断面図 1/2500



A-A' 断面図 1/2500

# 全蓋式アーケード商店街の分析と再生計画

—静岡県沼津市仲見世商店街—

Y10006 市川瑠美

指導教員 前田英寿

## 1. 研究の背景と目的

商店街の衰退が深刻である。モータリゼーションやライフスタイルの変化が進む中、郊外型ロードサイドショップや駅ナカ商業施設の増加等により商店街の利用者が減少し、空き地・空き店舗が増えた。かつて住民にとって必要不可欠だった地域に密着した商店街の意義が失われつつある。その一方で歩行者優先や低層路面型といった商店街が有する空間資源は都市にとって貴重な財産である。本研究では全蓋式アーケードなど空間的特徴をもった駅前商店街を取り上げ、その空間分析と共に再生計画を提案する。

## 2. 都市デザインプロジェクトの分析

今日の都市デザインの方向性を探るため日本建築学会大会建築デザイン発表梗概集を分析した(中村悠共同)。

### 1) 建築デザイン発表会とは

日本建築学会が主催するもので毎年メインテーマを定めて開催されている。応募作品の中で採択されたものが梗概集として収録されている。

### 2) 都市デザイン選定基準

- ①建築：修士・卒業設計や実施作品
  - ②都市計画：都市の方向性やまちづくりの提案
  - ③コミュニケーションデザイン：ワークショップ等
- このカテゴリーのいずれか又は複数に属するものを「都市デザイン」と認定し選別した上で、サイト(敷地)による分類を行った。その結果、地方都市のアーケード商店街に興味を抱いた。

表1 サイト(敷地)による分類

1、大都市(東京)	・西郷信彦(2009)『街に同化する駅舎』 ・隈本早貴(2011)『奥行きのある商店街』
2、大都市(名古屋)	・荒川智充(2009)『Nagoya Edutheque』 ・谷口桃子(2010)『彩りストリート』
3、大都市(大阪)	・島崎和也(2009)『あの窓をこえて』 ・井谷隼(2010)『メディアステーション』
4、大都市(その他)	・岡本達也(2008)『Intensive Station』 ・大橋晃一(2011)『ひるのうち～多世代が集うコミュニティプラザ～』
5、県庁所在地	・牧野俊崇(2011)『金沢市新町における都市の代謝による地域再生プログラム』 ・石井宏佑(2012)『街のような』
6、地方中核都市	・森川依美(2008)『市町村合併後の新市庁舎設計に関する提案』 ・隈部俊輔(2008)『尾道港再生計画』
7、地方小都市(中心市街地)	・福屋粧子(2008)『大きな部屋のあつまりとしての都市複合施設』 ・玉那覇雅人(2009)『三河田原駅周辺プログラム』
8、地方小都市(その他)	・竹森恒平(2009)『地方への移住を促進させる体験期間付分譲住宅の設計』 ・森川智充(2011)『郊外都市・春日井における地域交流拠点としての小学校』
9、海外	・高橋健人(2011)『海洋環境復元における都市再生への試み』 ・榎本翔太(2012)『対話の建築-日韓に於ける歴史及び文化交流施設-』
10、モデルケース	・南一誠(2008)『地方都市の中心市街地活性化のためのシティホールの計画』 ・北原祥三(2012)『震災復興のまちづくり森と海の間』

## 3. アーケード商店街の事例調査とパタン抽出

アーケード商店街8カ所の事例調査を行い、特徴(パタン)を抽出した。アーケード商店街の利点・欠点や他の商店街と共通する点・異なる点など実際に現地調査を行い、気づいた空間的な特徴を挙げ、その上でその要素がどの商店街のどの部分にあったのかを地図に表した。

表2 アーケードの事例調査

①	宇都宮	オリオン通り商店街
②	大宮	一番街商店街
③	前橋	中央通り商店街
④	〃	弁天通り商店街
⑤	〃	オリオン通り商店街
⑥	高崎	中央銀座商店街
⑦	沼津	仲見世通り商店街
⑧	〃	新仲見世通り商店街

表3 パタン抽出

1 小さな広場	③
2 コンバージョン	⑧
3 一休みのベンチ	⑦
4 通りの真ん中に商品	②
5 駐車場	①,③,④,⑤,⑥,⑦
6 ささまざまな飾り	③,④,⑤,⑦
7 歩行者専用	全て
8 開閉式アーケード	
9 高齢者施設	④
10 ビジネスホテル	①
11 路地	①,②,③,④,⑥,⑦
12 情報発信	①
13 大型店	②,③
14 連続店舗	全て
15 2階以上	〃
16 単調な屋根	〃
17 一体感	〃
18 井戸端会議	〃
19 学校	⑦
20 離れた住居	全て
21 個人商店	〃
22 買い物交流	〃
23 店先学校	〃
24 複合建物	〃



図1 一休みのベンチ(沼津)



図2 通りの真ん中に商品(大宮)



図3 歩行者専用(沼津)



図4 一体感(宇都宮)

## 4. 設計計画

### 4-1 対象都市

設計対象を静岡県沼津市に定めた。

沼津は東京から100km圏に位置し静岡県東部にあって恵まれた自然環境をもつ、静岡市・浜松市に次ぐ静岡県第3の都市であり、特に新鮮で豊富な魚介類が有名な沼津港は一大観光スポットとなっている。人口は20万人を有し、鉄道利用客は一日平均2万人であるが駅前には人を滞在させる機能はほとんどなく鉄道利用者は駅と自宅の往復となっている。しかし現在は駅を中心として多くの再開発が計画されており、駅前空間を重要視している場所であるといえる。



写真1 沼津市航空写真



## 4-2 対象敷地

静岡県沼津市大手町仲見世商店街を設計対象に仮定する。駅から徒歩2分という恵まれた立地条件であり地方都市としては比較的賑わいがある商店街である。ここは駅から沼津港までの間に位置しており商店街内には専門学校、周辺には小学校などの教育施設がある。地方都市としては活気がある商店街だが二階以上の空間は空き店舗が多い。

都心にあるような人込みが絶えないものでもなく、全く寂れている訳でもない、地方都市の生き残っている商店街を敷地とし、商店街に新たな要素を組み込むことで再生案を提案した。



図5 沼津駅周辺図

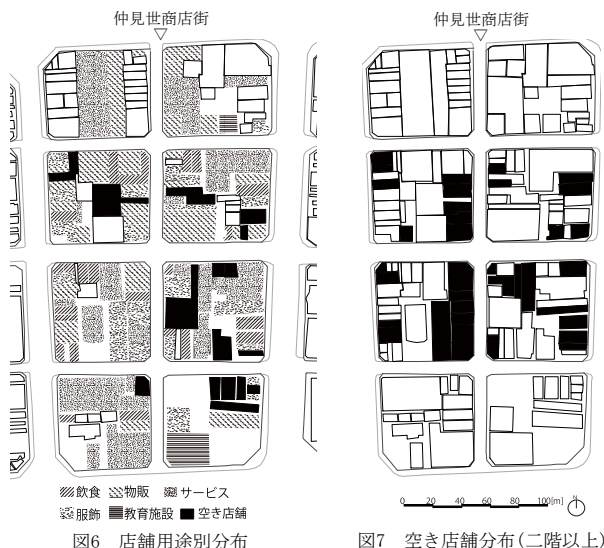


図6 店舗用途別分布

図7 空き店舗分布(二階以上)

## 4-3 コンセプト

アーケード商店街の一体感を利用した子ども園及び異世代交流施設を提案する。

### ①大きな学校

アーケードの屋根の中で商店街はひとつの建物である様に感じられる。商店街のすみずみが子供の遊び場となる。



写真2 アーケード写真

### ②色々な先生

子どもたちの「先生」は地元のおじいちゃん、おばあちゃん。みなが人より少しだけ得意なことの「先生」になる。そしてここは定年後に時間を持て余す高齢者の為の交流の場でもある。

### ③賑わいの持続再生

多世代が買い物以外にも訪れることにより商店街の活力を守り育てる。

## 4-4 設計手法

①空き店舗を除去し、小さく抜けた空間は「路地」に、大きく抜けた空間は「小さな教室たち」に変化させる。

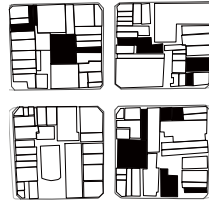


図8 1階空き店舗



写真3 小さな教室

②二階以上の空き店舗を新たな保育施設としての空間に更新する。

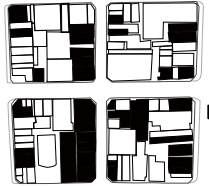


図9 2階空き店舗



図10 新たな空間の挿入

③アーケードの一体感を街区の中にまで広げていくため屋根を一方方向だけではなく直角に交差する方向に掛ける。



図11 アーケードイメージ

④今まで街区の「アン」だった空間を抜くことにより商店の「ウラ」が「オモテ」に変化する。

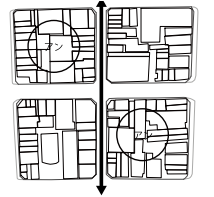


図12 ガワ(表)とアン(裏)

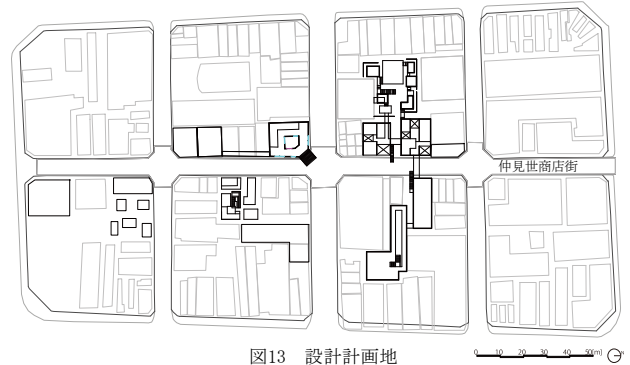


図13 設計計画地

## 5. 結語

本研究では地方都市の駅前にあるアーケード商店街をとりあげた。現在、撤去されることが多いアーケードの空間資源としての魅力に再度着目し、それらを生かせる様な設計提案を行った。

## 参考文献

- [1] クリストファー・アレグザンダー：パタンラングエージ環境設計の手引き、鹿島出版会（1984）
- [2] 沼津市役所ホームページ <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/>
- [3] 日本建築学会大会建築デザイン発表梗概集（2008-2012）
- [4] シュリンキング・ニッポン 縮小する都市の未来戦略 大野秀敏+アバンアソシエイツ 鹿島出版会（2008）
- [5] 全国アーケード商店街一覧・全蓋式 <http://tamagazou.machinami.net/zengai.htm>

# 水郷都市の保全再生計画

## －茨城県潮来市－

Y10012 笠原 由季

指導教員 前田英寿

### 1. 研究の背景と目的

東日本大震災により、茨城県潮来市は液状化現象が発生した。また潮来市は、利根川の水運で発達した水郷都市である。しかし、鉄道や自動車への交通転換により歴史的市街地において水辺との関わり方が希薄している。以上の事から、水辺を中心とした都市再生を液状化の対策を踏まえながら研究する。

### 2. 潮来市の概要

#### 2-1 潮来市の現状

人口は約30,000人である。現在人口減と高齢化が進んでいる。位置は首都圏から約80km、北は行方市、南は神栖市、東は鹿嶋市、西は千葉県香取市に面している。北部は海拔30～40kmの行方団地、南部は低地となり、東部は北浦に面し、西部は霞ヶ浦と北利根川、南部は浪逆浦というように水辺に囲まれて豊かな水郷景観と水産物をもつ。総面積は、霞ヶ浦、北浦、鱈川、常陸利根川、外浪逆浦等の水面を含み、約68.35k㎡である。北部の台地は畑及び山林が占め、南部の低地は水田として稲作が盛んな地域である。主な道路は、東関東自動車道、国道51号、国道355号、主要地方道水戸神栖線がある。鉄道は国鉄鹿島線香取～鹿島16.7kmが開通されている。市街地は、国道51号沿道に形成されている。

#### 2-2 利根川流域における潮来

平安末期に関東地方では利根川下流域を中心に水上交通が発達した。そして、慶長5年徳川氏が幕府を開く際に、江戸を中心とした河川水運網や沿岸海運が整備された。潮来地方を含む霞ヶ浦、北浦及び下利根川流域でも、徳川幕府による利根川の東遷事業によって、江戸と結ぶ内陸水路が確立し、常陸国の年貢米や様々な物資が川船で江戸まで廻漕されるようになった。また、東北諸藩の年貢米や諸物資が内川廻り潮来経由で廻漕されるようになったため、潮来の前川沿いには仙台藩や津軽藩などの蔵屋敷などが設けられ、潮来は港町として、また行楽地として繁栄した。



図1 潮来市の位置

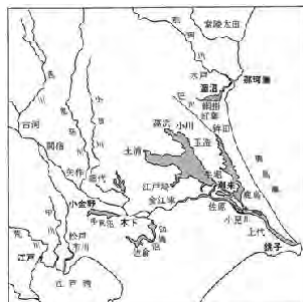


図2 近世初期の水運関係図

### 3. 歴史的市街地の調査

明治時代から市街地が存在している所を地図で把握する事が出来た。その場所は下の図の灰色で囲まれている所である。そこは前川沿いであり、水運が発達した所である。現在に至るまでどのような場所だったのかについて調査した。調査する際に、現在の潮来地区（旧潮来町）を範囲にし、前川沿いと前川と並行する道沿いに焦点を当てた。さらに以下の5項目に分け、この市街地はどういう所なのか明確にする。

- ① インフラ：道路・水路・公園緑地
- ② 建物（新旧・用途）
- ③ 市民活動：祭り・商店街・住民活動
- ④ 空間資源：河川
- ⑤ その他：河岸・案内図・被害状況



図3 現在の街路図



図4 明治時代に存在していた市街地(明治36年)



歴史的市街地を調査した結果、液状化被害のエリアに該当しており、水運の衰退によって水辺と建築物が関係し合っていない事が分かった。河岸や江間（水路）、河川などがほとんど埋め立てられ、水辺の風景が少なくなり、水郷潮来が変貌しつつある。しかし、歴史的建築物や石蔵などがまだ点々と残されている。また残された石田川と前川には昔ながらの風情を感じる事が出来る。以上の事から、現在の被害状況の対策を踏まえ、今残っている空間資源や建築物を活かす事が出来るような設計を提案する。

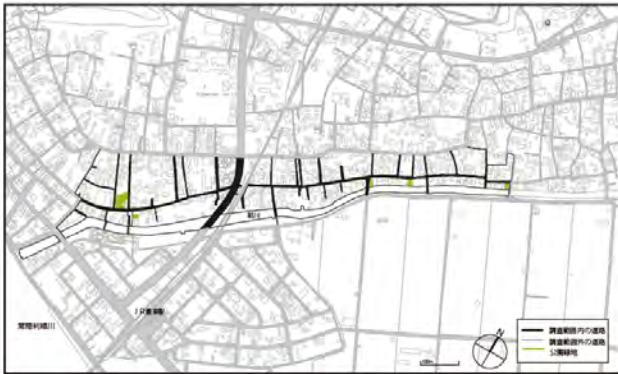


図5 インフラ（道路）

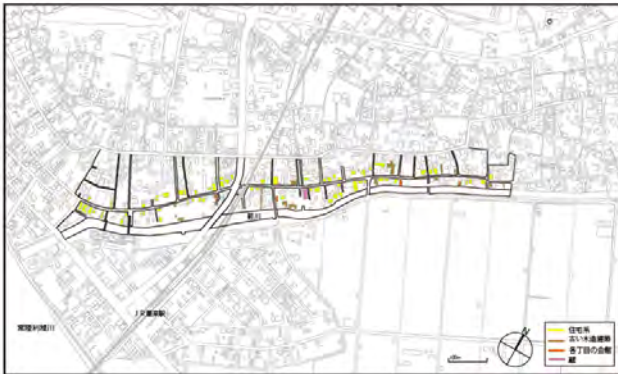


図6 建物利用図

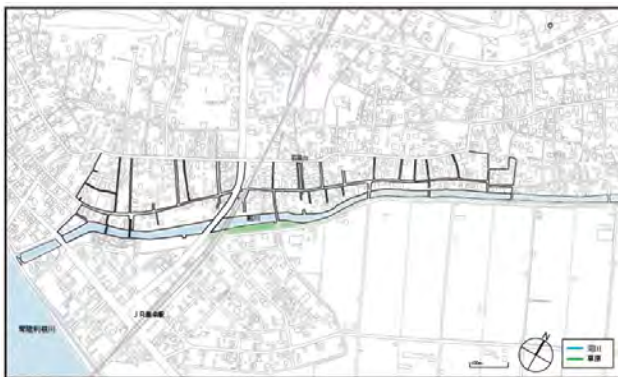


図7 河川図



図8 現在の潮来市潮来地区と昔の船入場の比較

#### 4. 設計計画

設計する対象敷地は石田川付近にする。そこに観光地として、また住民の人たちも水郷潮来について知っても

られるように用途を野外博物館にした。さらに液状化対策は以下の通りである。

- ① 地盤改良
- ② 過去に水辺があった所を避ける
- ③ 全部の建物を平屋にする。



図9 石田川付近に存在していた天王河岸



図10 敷地周辺地図



図11 対象敷地（現状）



図12 配置兼平面図（設計）



写真1 敷地模型

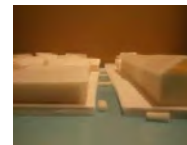


写真2 石田川沿い



写真3 野外博物館



写真4 敷地周辺

#### 5. 結語

本研究では、自分の故郷である水郷潮来を取り上げ、保全再生計画を考えた。石田川と一部の河岸を復元させ、また歴史的建造物を保全する事によって、昔の潮来のあり方を目で感じる事ができ、水辺との関わりを増やす事が出来るような提案をした。住民の人たちだけでなく、色々な人たちに水郷潮来を知ってもらい、希薄化していた水辺との関係が増えてくれる事を望む。

#### 参考文献

- [1] 潮来町史編さん委員会. 潮来町史. 潮来町, 1996, 1002p.
- [2] 潮来市都市計画マスタープラン
- [3] 潮来町郷土史研究会. ふるさと潮来. 潮来町郷土史研究会, 1994, 129p (第10輯).
- [4] 茨城県潮来市公式ホームページ
- [5] 鹿島町市刊行委員会. 鹿島を中心とした交通と運輸. 鹿島町, 1985, 608p.
- [6] 潮来町史編さん委員会. 昭和に生きる 写真集. 潮来町史編さん委員会, 1995, 110p.
- [7] 佐原・潮来 利根川水運の中継地として江戸を支えた水郷の町並み. 株式会社学習研究社, 2005, 34p.
- [8] ふるさと牛堀刊行委員会. ふるさと牛堀. 牛堀町, 2001, 271p.

# 公共事業における紛争と解決のメカニズム

Y10016 栗原 優  
指導教員 前田 英寿

## 1. 研究の背景と目的

大宮駅東口の再開発や上尾道路など、自分の身近な場所を少し見渡しただけでも、都市計画には困難が付きものであると感じられる。行政の側としては、住民のために街をより良くしていこうという目的を持って都市計画を行っていることは間違いない。にもかかわらず、トラブルが起きてしまうのはなぜか。それは、より多くの住民の為に行われる公共事業において、一部の住民に負担が集中してしまうことが多くあるからだ。行政側の都市計画が非常に長い目で策定され、現地住民の実感が伴わないこともある。

本研究でとくに注目したいのは、行政の都市計画が広域的な住民の総意によるものであるという点である。そうでないものも希にあるが、多くの場合、市民や県民の利益のために都市計画が行われている。つまり、公共事業における紛争というのは、広域的な住民の利益と一部の住民の利益がぶつかり合うものであるといえるのではないか。これは、民間のマンション建設紛争に代表されるような企業の利益と周辺住民の利益が対立する構図よりも遙かに複雑であり、研究のしがいがありそうである。本研究では、このように複雑な利益関係をもつ公共事業を調査、考察し、公共事業における紛争と解決のメカニズムを理解するとともに、より良い当事者同士の関わり方がどういったものなのかを提案することを目的とする。

表 1: 公共事業と民間事業における争点の違い

	大規模公共事業	民間の開発事業
対象	鉄道・道路・空港・ダム・発電所など	大型マンション・レジャー施設・斎場など
特徴	広域的にはプラスになるものの、建設予定地付近の住民に負担が集中する。さらに、建設予定地付近の住民には、利益がほぼ0であるケースもある(例:新幹線建設)また、公共の利益を優先するという原則により、被害を被る住民の権利が軽視される傾向が強かった。	多くの場合、周辺住民への利益は無く、日照や景観に害を及ぼすため、周辺住民に賛成派は少ない。企業の利益 vs 住民という構図が明確になりやすい。

## 2. 公共事業紛争の有名事例

公共事業紛争とは、公共施設・インフラの建設に伴うものだけでなく、行政の民間工事への監督行為の不服に伴うものも含まれ、幅広い事例を含む。国策による工業化によって引き起こされた環境汚染については明治の頃より

訴訟が行われている例もある。しかし、住民が次第に公共事業に対し積極的に関与するようになり、景観利益までも含めた権利を主張するようになったのはごく

最近のことである。既往研究より多くの紛争は、「景観権」「財産権」「人格権」という3種類の権利によって分類できることがわかった。

この3つの権利は事件によっては重複することも多いが、多くの事件を整理するにあたり有効な着目点である。そこで、この権利ごとに以下の有名な公共事業紛争を整理した。

表 2: 3つの権利

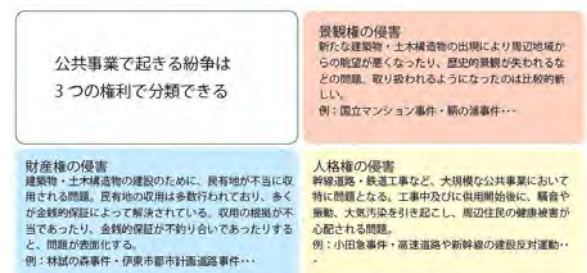


写真 1: 国立マンション事件

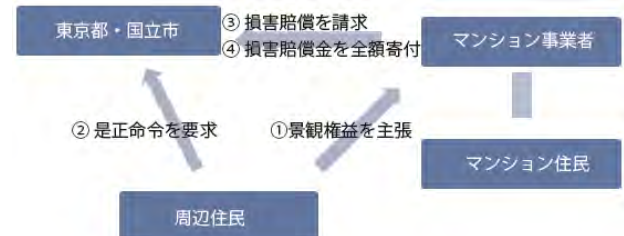


図 1: 景観権のメカニズム (国立マンション事件)

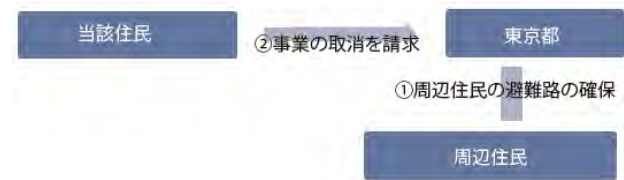


図 2: 財産権のメカニズム 1 (林試の森事件)

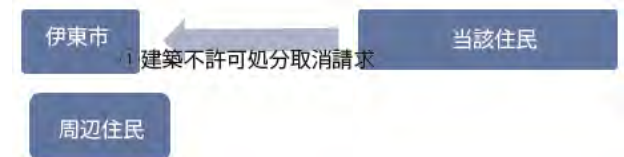


図 3: 財産権のメカニズム 2 (伊東市都市計画道路事件)



### 3. 小田急事件

3つの権利のうち、金銭的な解決が比較的難しく、住民同士の利害関係も複雑になりやすい人格権にまつわる小田急事件、東北・上越新幹線反対運動についてさらに詳しく調査した。

小田急事件は、踏切による道路渋滞の解消と鉄道の輸送力増強を図り、都市部で進められている連続立体化工事にまつわる事件で、一部区



写真2: 環八通りと小田急線の交差点

間において高架化か地下化で紛争がおこった。本事件が建築紛争の判例の中で大きな意味を持ったのは、原告適格に関する画期的な判決があったからである。そのため、原告適格以外のことは既往研究においても隠れがちであった。しかし、本事件は、都市部における交通インフラの整備の難しさについてとても分かりやすく見る事ができる事例である。道路と鉄道の摩擦については解消しなければならない地点がまだ多く残されている。1964年から各会社線に先駆けて行われた計画にもかかわらず、小田急は、東京都や沿線住民、鉄道利用客の利害のバランスを踏まえずに工事を進めたように見える。

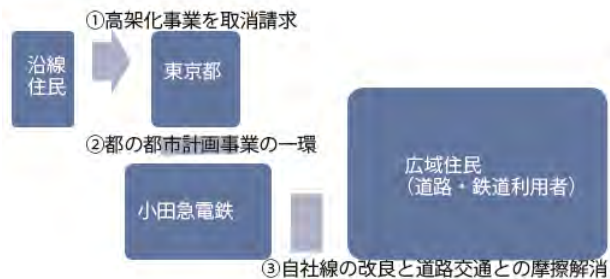


図4: 人格権のメカニズム1(小田急事件)

### 4. 東北・上越新幹線反対運動

東北上越新幹線建設時、東京都北区から埼玉県南部の住宅密集地域では、先に開通していた東海道新幹線の騒音や振動問題により大規模な反対運動が展開された。建設時に国鉄から地元自治体に示された、「通勤新線の建設」「新幹線のスピードダウンと緩衝地帯の設置」「大宮駅に全列車停車」「大宮～伊奈間に新交通システムを導入」という4つの補償に沿って調査した。これらの中でも、埼京線やニューシャトルに関しては問題なく補償として機能してい



写真3: 更地のままの緩衝地帯 写真4: 公園となった緩衝地帯

るといえる。一方、広大な緩衝地帯については今後も課題として残り続けるだろう。この緩衝地帯は、設置から現在まで高架と住宅地を約20m離すという最も単純な意味での緩衝機能は果たしてきた。しかし最近、河童の森公園を始めとして各地で、ただ高架を遠ざけるだけではない利用方法が模索されている。建設反対運動時には遠ざけようばかり考えられていた新幹線高架の周辺にまた人が集い始めているという点で興味深い動きである。

私は、この動きこそが地域に対するもっとも大切な補償になるのではないかと考えている。新幹線建設当初は、埼京線やニューシャトル建設に比べて地味な存在であったかもしれないが、苦心しながらも地域ごとに特色のある空間が作られつつある。これは、おそらく新幹線建設時に国鉄が思い描いた補償の形では無いだろうが、各地域にとってとても大きな財産になるだろう。

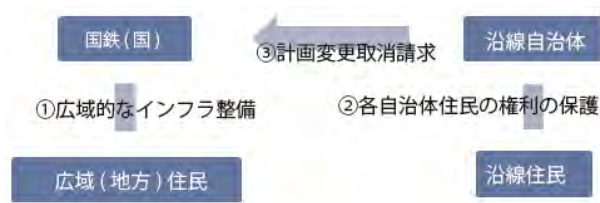


図5: 人格権のメカニズム2(東北上越新幹線反対運動)

### 5. 結語

多くの事件で共通して見られたのは、住民間や事業者の意見の相違を調整する行政の苦勞であった。住民と事業者間に争いが発生することもあるが、意見を異にする住民同士での直接的な紛争はほとんど発生しておらず、様々な意見を持つ住民が直接住民同士で争わずにクッションとして行政に意見をぶつけているようだ。このため、紛争解決後に地域住民同士の関係が悪化することがないのだろう。

一方で、紛争後に住民の中から積極的にアクションを起こしていく人も出てくる。地域をより良くしてく活動は、建設事業者でも行政でもなく、その地域を最もよく知っている住民自身が先頭に立って活動していくのが効果的であるということだろう。自治体のできることは限られている。紛争を経た地域づくりも、最終的には地域の住民のエネルギーにかかっているのである。

#### 参考文献

- 柳沢厚・野口和雄・日置雅晴編(2007)自治体都市計画の最前線 都市計画まちづくり判例研究会編著(2010)都市計画・まちづくり紛争事例解説
- 越智敏裕著(2009)公共事業紛争における公法と私法の交錯-都市施設の設置を巡る訴訟を題材に-
- 船橋晴俊・長谷川公一・畑中宗一・梶田孝道(1988)高速文明の地域問題-東北新幹線の建設-紛争と社会的影響-
- 最高裁小法廷判決(2006年11月2日)
- もぐれ小田急(<http://www.bekkoame.ne.jp/>)
- Wikipedia各ページ



# 自治体の環境政策と再生可能エネルギー

Y10020-7 鈴木 大介

指導教員 前田 英寿

## 1. はじめに

昨今、温暖化などの環境問題が世間を賑わせている。環境問題は私たちにとって決して無関係なものではない。そこで私は、都市空間を通して環境問題対策ができないかと考え、環境施策についての研究に着手した。我が国で現実的に実行可能であり、効力を発揮できる環境政策を導き出したい。特に再生可能エネルギーに着目していく。

## 2. 環境未来都市

### 2-1. 環境未来都市の概要と各都市の取り組み紹介

環境未来都市構想は、特定の都市を環境未来都市として選定し、環境や超高齢化に対し、技術・社会経済システム・サービス・ビジネスモデル・まちづくりの成功事例を創出するとともに、それを国内外に普及展開することで、持続可能な経済社会の発展を目指すものである。



図1 環境未来都市概念図(出典:環境未来都市HP)

環境未来都市には11都市が採用されている。各都市が掲げる主な環境施策を表1にまとめた。その内容について分類をしたのが図2である。

図2 環境未来都市の分類

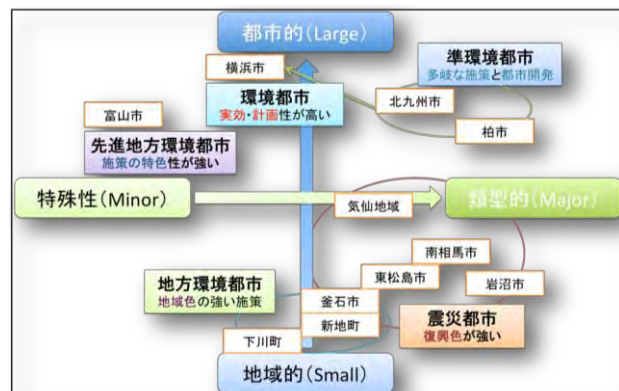


表1 環境未来都市の環境施策

新地町	太陽光、バイオマス発電
釜石市	風力、バイオマス、 <b>海洋エネルギー</b>
東松山市	高効率化、CASBEE
南相馬市	メガソーラー、風力、バイオマス
岩沼市	メガソーラー
気仙地域	コンパクトシティ、蓄電メガソーラー
北九州市	太陽光、エネルギーマネジメント
富山市	<b>海洋バイオマス</b> 、 <b>小水力発電</b>
横浜市	タウンマネジメント、パッケージ化
下川町	循環森林バイオマス
柏市	マルチエネルギー化、スマートシティ

### 2-2. 環境未来都市にみる環境施策

各都市の環境未来都市構想における環境政策の特色を図2より、下表にまとめた。

表2 環境未来都市の分類と特色

先進環境都市	横浜市	実効・計画性が高い
	富山市	施策の特色が強い
準環境都市	北九州市	多岐な施策を展開
	柏市	都市開発による施策
地方環境都市	下川町	森林利用の強化
	新地町	シフト化施策
震災都市	気仙地域 岩沼市	震災復興
	東松山市 南相馬市	

震災都市は総じて復興色の強い施策が並んだ。その他は多少の規模の差はあるものの、施策の内容に差は小さい。下川町、新地町は人口が少なく、限られた範囲の中での構想のため、既存の地域色を生かす施策である。北九州市と柏市は、環境モデル都市にも採用され、典型的な施策が目立つ。横浜市は日本を代表する環境都市であり、施策にも現実性や実行性が強く感じられる。富山市も小規模水力発電や海洋資源を利用する点で日本を代表する環境都市である。

## 3. 再生可能エネルギー

### 3-1. 現在のエネルギー事情と再生可能エネルギー

現在は、経済性等の観点から化石エネルギーがエネルギー供給の大半を占めているが、将来における枯渇が危惧されているほか、二酸化炭素の排出による地球温暖化の原因にもなっている。一方、再生可能エネルギーは、自然環境

の中で無限に繰り返し利用することが可能であるとともに、クリーンなエネルギーであることから、エネルギーや環境問題の解決に大きく貢献できる。「エネルギー源として永続的に利用することができる」と認められるもの」として、①太陽光 ② 風力 ③ 水力 ④ 地熱 ⑤ 太陽熱 ⑥ 大気中の熱その他の自然界に存する熱 ⑦ バイオマスが注目されている。

### 3-2. 各地域の取り組み-ミニ電力会社-

地域の住民や企業がお金を出し合い、「ミニ電力会社」をつくる動きが全国に広がっている。地元の自然エネルギーを生かして電気を「自給自足」しようという意識が高まったからだ。主なミニ電力会社（8社）の中で、おひさま進歩エネルギーの取組方針に興味を持ち、次章では飯田市を代表例として、取り上げていく。

## 4. 飯田市の環境政策

飯田市は、長野県の南端、諏訪湖から流れる天竜川に沿った南北に広がる「伊那谷」の中心都市である。東西を南アルプスと中央アルプスに囲まれた急峻で狭隘な地形に位置し、豊かな自然の中で人の営みが育まれてきた。総面積が658.76k㎡、うち森林面積が84%、およそ10万7千人が居住する典型的な中山間地域である。

飯田市を訪問し伝統的取り組み、ISOの取得、21世紀環境共生型住宅、エネルギー政策、おひさま進歩エネルギー、環境モデル都市の取り組みについて調査しヒアリングした。

上記のおひさま進歩エネルギーのヒアリング時に環境教育に関して聞いた。保育園などの「市民が集う施設に太陽光発電システムを導入する」というハード面の整備と、子どもたちの「環境教育に結びつける」というソフト面がかみ合っている印象であった。

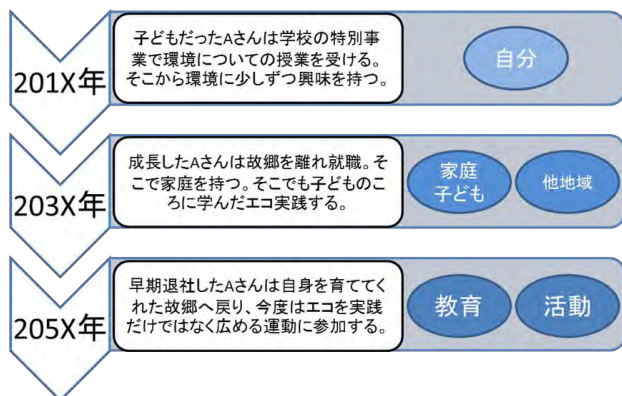


図3 環境教育

環境教育による波及効果も興味深かった。幼稚園内での節電等はもちろん、家庭でも省エネの活動が生まれてきていて、家庭全体でエコの意識が向上できたとの声が多数から挙がっているようだ。ハード面やソフト面のどちらか一方

の整備ではなく、ハード面とソフト面の整備がバランス良く進めること、進められれば期待以上の成果が得られることがわかった。

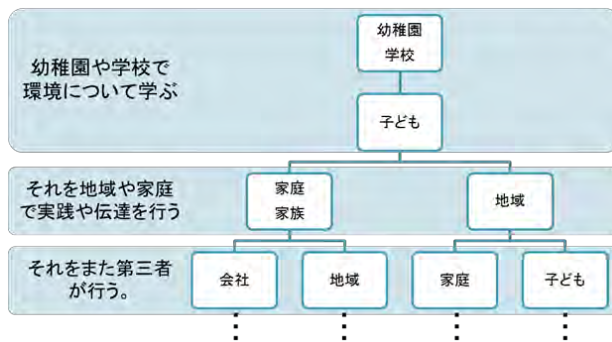


図4 教育現場の取り組みからの波及イメージ図

## 5. 結語

本研究を通して、明らかになったことを記す。

### ① 技術面(ハード面)

都市に対し、CO<sub>2</sub>削減技術の導入や再生可能エネルギーによる電力供給の調整などがある。他にも、エココンパクトシティなどの構想などもあり、政策は多岐にわたる。

### ② 民生活動面(ソフト面)

市民や企業の主体的な取り組みを促すための啓発活動や制度、環境教育や条例制度等があった。これらは特に、削減量の算出方法が曖昧な部分があり、効果としては表れにくいのが現状である。ハード面同様に政策数は多い。

飯田市のおひさま進歩エネルギーの「幼稚園+太陽光発電」のような、環境を考えられる要素(環境エネルギー発電機など)が、生活の近くにある事、これが一番民生部門において影響を与えられるのではないかと感じた。他にも、小水力発電であれば、オーストリアのVORTEXは、水質が向上するため、ピオトープなども併設できる。これからは、ハード面とソフト面の本格的な一体化が、自治体が取り組む環境政策の第一歩になることを祈っている。

## 参考文献

環境未来都市HP : <http://futurecity.rro.go.jp> ・ 南相馬市HP : <http://www.city.minamisoma.lg.jp/index.cfm/> ・ 朝日新聞(ミニ電力会社) : [http://digital.asahi.com/articles/TKY201307220753.html?ref=comkiji\\_txt\\_end\\_s\\_kjid\\_TKY201307220753](http://digital.asahi.com/articles/TKY201307220753.html?ref=comkiji_txt_end_s_kjid_TKY201307220753) ・ 飯田市HP : <http://www.city.iida.lg.jp/> ・ 飯田市環境モデル都市行動計画 : <http://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/14683.pdf>



# 旧宿場町における歴史的建築物の分布と保全活用

## —埼玉県 10 都市—

Y10022 関根 璃菜

指導教員 前田 英寿

### 1. 研究の背景と目的

埼玉県は東京のベッドタウンとして高層マンションや住宅が多く立ち並び、往時の街並みは大きく変わった。それでも注意深く観察すると、どんな街にでも歴史的な建築物や空間は残っており、景観資源として現在の町並みと共存し続けている。本研究では埼玉県内10箇所の宿場町を取り上げ、それぞれの町における歴史的建築物の分布かつ保全活用の違いについて探ることを目的とする。歴史的建築物のデータは埼玉県田園都市づくり課のデータを使った。

### 2. 都市地域別分析

埼玉県内61箇所の宿場町の中から10箇所を取り上げた。10箇所を選定する上で歴史的建築物と現代の町並みが混合している町、更に各地域で町の発展の仕方が比較できる地域を条件とした。また埼玉県全域に渡り調査を行えるよう調査地域を広範囲にした。10都市の現地調査を行い町の構成・歴史的建築物の残り方または保全活用の仕方・最寄り駅との距離・東京からの距離に着目した。



図1 埼玉県内調査地域(調査10都市ハッチ)

これら10都市における共通点は残された歴史的建築物の使われ方であり、ほとんどは店舗として使われているところが多い。これは店舗の方が昔も今も需要があり残されやすかったのではないかと考えられる。また時代に合わせコンバージョンを行うことでより現代の町並みとニーズに合った建築物となっている。

相違点としては町によって景観資源としての扱われ方が違うことである。ここで歴史的建築物を町の資源として有効活用している地域と歴史的建築物が単体で現代の町並みに残されている地域との2つに分かれる。例を挙げると川越市と旧鳩ヶ谷市が比較しやすい。まちづくりとして一番街や大正夢浪漫通りなど江戸から大正まで様々な

時代の建築物が保全されると共に歴史的建築物が活かされたまちづくりとなっている。一方、旧鳩ヶ谷市では住宅化が進み高層マンションが建ち並ぶ中、いくつかの歴史的建築物が開発群の中に取り残されている。その中で空き家や空き蔵といった人の管理が行き届かなくなった建築物が存在してしまっている。

このように地域によってまちづくりに違いができてきたのは、その町の歴史や町の発展の違いと人々のまちづくりに対する意識の違いによるものと考えられる。

表1 10都市の町の特徴

岩槻区	古くから人形の町として栄える。
桶川市	中山道の宿場町。近年は住宅化が進行している。
川越市	城下町として栄え、数多くの歴史的建築物が現在も残っている。
行田市	足袋の生産で栄え、足袋蔵が多く残っている。
志木市	学校や住宅が建ち並ぶ中、歴史的建築物が点在する。
草加市	綾瀬川沿いに日本道百選の遊歩道がある。
秩父市	町は山に囲まれており、木造の歴史的建築物が数多く残る。
旧鳩ヶ谷市	住宅やマンションが建ち並ぶ中、蔵や木造建築が少し残っている。
飯能市	山登りや川遊びなど自然を重視した町だが、町の中には趣ある建築物が少し残る。
本庄市	レンガ造りや洋風建築、蔵などが町の至る所に点在する。

### 3. 建築物別分類

10都市における町の特徴が表れている建築物(蔵や洋風建築など)を分類することで共通点や相違点などを探る。また共通の建築物の使われ方の違いやデザインの違い、保存・活用の仕方などを比較する。

表2 特徴的建築物

木造建築	木の材質が建物全面的に表れる
木造洋風建築	木造の面影を残しつつ鮮やかな色彩
洋風建築	レンガやRC、木造など造りは様々ある
RC建築	現代的でありRCの重圧が感じられる
蔵	蔵造りの特徴が表れ存在感が大きい
現代建築	技術が駆使され非常に現代的



写真1 木造民家(秩父)



写真2 元病院(秩父)



写真3 元警察署(本庄)



写真4 ギャラリー(川越)



写真5 ギャラリー(行田)



写真6 住宅兼店舗(鳩ヶ谷)

町によって木造建築や蔵などカテゴリーは同じだが、その中でも造りの違いが表れる。川越市と行田市を比較すると双方とも蔵造りが特徴的であるが蔵造りにも違いが表れる。川越市では土蔵造りで重圧感があるのに対し、行田では足袋蔵造りの蔵が多い。川越市では明治に大火があり耐火建築が推奨されてきた。その影響により火に強い土蔵造りの蔵が多く建てられた。一方行田市では古くから足袋の生産が栄え町の経済を支えてきた。このように建築物から町の歴史や文化といった特徴が表れることがわかった。

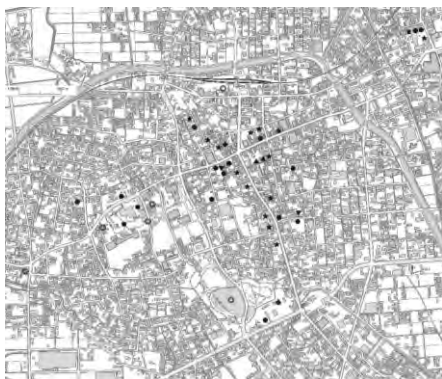


図2 行田市中心市街地地図



図3 秩父市中心市街地地図



図4 行田市明治時代地図

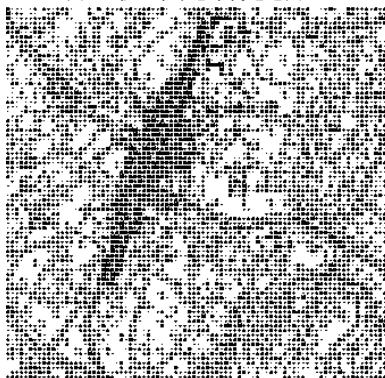


図5 秩父市明治時代地図

#### 4. 10都市の比較分析

##### (1) 地図によるプロット

埼玉県田園都市づくり課より宿場等の景観資源調査データをもとに建築物について各地域の中心市街地地図にプロットアウトを行いそのデータを統計表にまとめた。

##### (2) 明治時代との比較

埼玉県の10都市について各地域の中心市街地地図と明治時代の地図を比較し現在と過去の町の移り変わりを分析した。

##### (3) 用途地域による色分け

埼玉県都市整備部都市計画課による埼玉県都市計画図を基に研究対象地域の用途地域別の色分けデータを参照し考察を行なった。

#### 5. 結語

歴史的建築物が今も残されている要因は歴史や文化、都市計画や市民活動など様々な方面から守られていることがわかった。だからこそ歴史的建築物が残されにくい環境であることも改めて考えさせられた。しかし歴史的建築物にはその町の歴史や文化、建築技術など多くのものが詰まっており、次世代に伝えていくための伝達手段の1つとなる。それを壊していくのはもったいない。今、歴史的建築物について見直す町も多くあり、現在残る建築物が今後、町の開発と共に取り壊されるのではなく、現代の町と調和できるようにまちづくりを進めるのが理想である。



写真7 忍城(行田)



写真8 足袋蔵(行田)



写真9 町並み(秩父)



写真10 神社(秩父)

#### 参考文献

- 1) 埼玉県田園都市づくり課HP  
<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/keikan-top/rekimichi-22.html>
- 2) 各10都市HP  
岩槻 <http://www.city.saitama.jp/>  
桶川 <http://www.city.okegawa.lg.jp/>  
川越 <http://www.city.kawagoe.saitama.jp/>  
行田 <http://www.city.gyoda.lg.jp/>  
志木 <http://www.city.shiki.lg.jp/>  
草加 <http://www.city.soka.saitama.jp/>  
秩父 <http://www.city.chichibu.lg.jp/>  
鳩ヶ谷 <http://www.city.kawaguchi.lg.jp/>



# 首都圏中山間地域における廃校のコンバージョン —千葉県市原市小湊鉄道沿線—

Y10026 露崎 裕也

指導教員 前田 英寿

## 1. 研究の背景と目的

近年、少子化や過疎化などが原因で廃校が増加している。学校は誰もが慣れ親しんだ空間であり、特に小学校は人生で最初の社会生活の場でもあるため思い出の多い空間である。本研究の目的は、中山間地域における廃校のコンバージョンの提案を通じて廃校の活用方法と地域活性化について考えるものとする。

## 2. 増改築・コンバージョンの事例分析

建物の用途・規模問わず、どんな再生が施されているかを調べた。2001年から2012年の建築専門誌（日本建築学会作品選集・新建築・a+u）から事例を集め、ダイアグラム分析を本多由香利と共同で行った。

例1) 双軸の舎（濱口邸）（出典[2]）



離れと母屋 渡り廊 ダイアグラム

例2) 「ゼンカイ」ハウス（出典[2]）



外観 内観 ダイアグラム

表1 転用後非住宅の事例

転用前の用途	転用後の用途	事例名	場所
学校	宿泊施設・ギャラリー	月影の郷	新潟県上越市蒲川原区
	文化・教育センター	バラサイト	オランダ デンヘルター
住宅	集会場	文化のみち 百花百草	愛知県名古屋市長区白壁 4-91-1
	ギャラリー	土佐山田の舎	高知県土佐山田町
	アトリエ	「ゼンカイ」ハウス	兵庫県宝塚市湯本町 4-29
	展示室	旧澤村邸改修	静岡県下田市
	資料館	上下町歴史文化資料館	広島県府中市
	ギャラリー	大島「家プロジェクト」 F邸 F・Art House	岡山県岡山市東区
蔵・倉庫・納屋	サロン/事務所	桶戸家の再生(米蔵と藍染納屋の再生)	岡山県倉敷市東町
	美術館	臺工ミュージアム	高知県高知市
	美術館	鞆の津ミュージアム	広島県福山市
	アーツスペース	VEGA	富山県富山市
工場	映画館	鶴岡まちなかキネマ	山形県鶴岡市山王町 13-36
	美術センター	イペリア現代美術センター	中国 北京
	文化センター	アンサルドの「文化の町」	イタリア ミラノ
郵便局	図書館・作業場	金山町街並み交流サロン・ぼすと	山形県金山町
公民館	図書館	妻有田中文男文庫	新潟県十日町市
事務所	事務所	スカイライト	オランダ アムステルダム
展示空間	展示空間	市原市水と彫刻の丘リノベーションプロジェクト	千葉県市原市

## 3. 廃校活用の現状

コンバージョンの事例分析の中で廃校の活用について興味を持ち、文部科学省の「廃校施設の実態及び有効活用状況等調査研究報告書（2000年）」を材料に廃校の現状調査や活用方法調べ、首都圏中山間地域における廃校のコンバージョンについて考えた。平成15年以降、廃校数が400を超え今後も廃校数が増加していくと考えられる。また小中学校が廃校になる主な理由が過疎化であることがわかっており、さらに過疎化による廃校の活用数は8割に達していないことがわかる。これらのことから、小中学校の廃校は活用方法見つからず放置されている事が推測される。一方、活用されている場合は既存の学校空間を継続利用している事例が多く見られ、これは学校の構造的安全性等のハード面や、学校への愛着等によるソフト面が優れていることが考えられる。

## 4. 設計計画

### (1) 対象地

本研究の対象地は千葉県市原市大久保にある旧市原市立白鳥小学校であり、都心から2時間半程度の距離に位置している。図1は都心（東京駅）から対象地の位置関係及び、対象地から等距離の地域を表している。市原市は北部に工業地帯、南部には緑豊かな自然と豊かな食材に恵まれた地域である。日本の高度経済成長に合わせ市原市でも臨海部の工業地帯や首都圏で働く人々のベッドタウンとして数多くの郊外住宅が広がり、人口増加が進んだ一方で、内陸部の南市原地域では少子高齢化が進み、過疎対策と地域活性化が急務となっている。また、市内のほぼ中央には小湊鉄道という私鉄が走っている。鉄道沿線には寺院や神社などがあり、市だけでなく県や国からも指定されている文化財や遺跡などもみられる。鉄道に乗って南下するにつれて、自然豊かな風景が広がり、ハイキングやキャンプ、温泉などを求めた観光客もみられる。



図1 都心から対象地の位置



図2 白鳥小学校周辺案内図

## (2) 対象建物

本研究の対象となる旧白鳥小学校は平成25年度より廃校となった。同様に近隣の小学校である高滝小学校・里見小学校・富山小学校も廃校になり、旧加茂中学校があった敷地内に小中一貫校である加茂学園として平成25年度より開校している。白鳥小学校は最寄駅である上総大久保駅から徒歩10分程度に位置している(図2)。周辺は起伏があり、丘の上に小学校がある。

敷地面積は15000㎡、延床面積は校舎が1814㎡で、体育館が573㎡である。間取りは、普通教室7室、教科教室5室、事務室10室である(図3)。

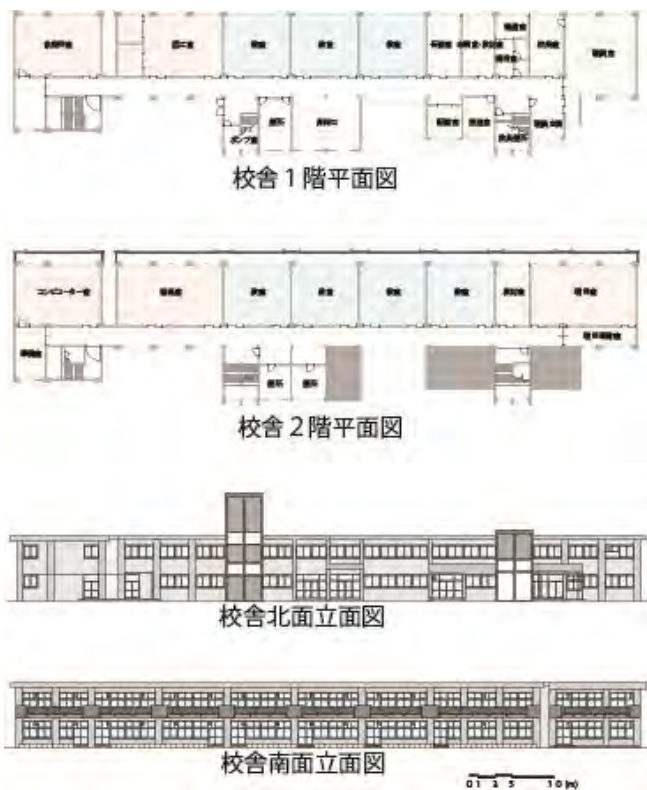


図3 現状校舎図面



図4 現状配置図

## (3) 提案内容

- ① 廃校を体験型宿泊施設に転用する。
- ② 利用者は東京都心からの観光客と近隣住民を想定する。
- ③ 1階部分はレストランと宿泊受付、体験室、ラウンジなど日帰り、宿泊両方に開かれた用途とする。
- ④ 3階部分を増築し、2階、3階に宿泊室を置く。
- ⑤ 体育館は野外炊飯を行える空間に再生する。
- ⑥ プール跡地に大浴場を設置する。

## 5. 結語

本研究はコンバージョン事例の分析を行い、その中で廃校の活用状況に関心を持った。廃校の活用は都心に比べ山間部の方が遅れている事がわかった。これは周辺の人口数や、ニーズの読み取りにくさが原因だと考えられる。使われなくなった建築物を建て替えるのではなく、新たな活用ができるように今後を活かしたい。

## 参考文献

- [1] 新建築 (2000年～2012年)
- [2] 日本建築学会作品選集 (2000年～2012年)
- [3] a+u(2000年～2012年) [4] 文部科学省HP
- [5] 千葉県庁HP [6] 市原市役所HP

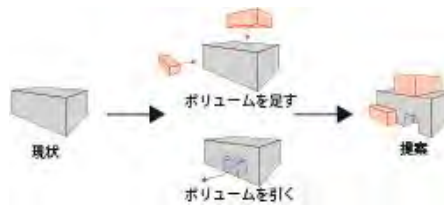


図4 外部ダイアグラム

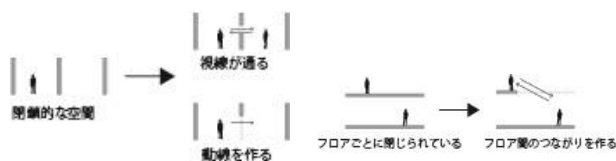


図5 内部ダイアグラム



図6 提案配置図



# 地方小都市におけるサイクリストの拠点計画

～島根県益田市蟠竜湖公園のリノベーション～

Y10028 中川 望

指導教員 前田 英寿

## 1. 研究の背景

### 1-1 目的

戦後、高度経済成長を果たした我が国であるが、近年急激な人口減少と高齢化が社会問題となっている。特に地方小都市は深刻である。一方でこうした地方小都市には豊かな自然や伝統、歴史が残っている。今日、地域資源を生かした<sup>(1)</sup>オルタナティブ・ツーリズムを取り入れた観光まちづくりが注目されている。本研究では故郷である島根県益田市を事例に、地方小都市を活性化させるために観光資源をどのように扱うかを研究する。

### 1-2 地方小都市の課題

地方小都市を研究するにあたりキーワードを20個あげ各地の取り組み、地方小都市と都会の違いについて調べることで、地方小都市の抱える問題点、課題の整理をした。

表1 20キーワード（共同作者 真砂 慎太郎）

	キーワード(20)
文化(5)	歴史 祭 観光 観光まちづくり 地域ブランド*
自然(4)	農業 生物 公園 水辺
社会系(11)	政治 少子高齢化 公共交通 買物弱者 医療 若者 大学生 密集市街地 防災 人口 ロジスティック

## 2. 島根県益田市と自転車ツーリズム

### 2-1 概要

島根県益田市は島根県西部に位置する<sup>(2)</sup>面積733.23km<sup>2</sup>、人口48,952人、人口密度66.8人/km<sup>2</sup>の市である。北に日本海、南に中国山脈がある。過疎化が進み2004年に合併した美都地区と匹見地区はその9割が森林、また人口の30%（3人に1人）が、山間地域では40%以上が高齢者であり、少子高齢化問題を抱える典型的な地方小都市である。



図1 島根県の位置

図2 益田市の位置

### 2-2 観光資源

深刻な問題を抱える一方、益田市には豊かな自然と文化、また恵まれた自然環境による特産品、レジャーがある。

表2 益田市の観光資源

自然	日本海、清流日本一高津川、匹見峡、中国山脈
文化	雪舟、柿本人麻呂、グラントワ、城跡、遺構、石州瓦
特産品	メロン、かき、ブドウ、ゆず、わさび、天然鮎
レジャー	釣り、サーフィン、キャンプ、温泉、登山

### 2-3 自転車ツーリズムの可能性

故郷である島根県益田市を活性化させるための地域資源として、近年環境負荷の少ない交通手段で注目されている自転車を活用した、自転車ツーリズムによる観光まちづくりが行えないかと考え、益田市を調査したところ“益田市・町おこしの会”というNPO法人が自転車によるまちおこしプロジェクトを積極的に行っていることが分かった。

### 2-4 益田市・町おこしの会の活動<sup>(4)</sup>

“NPO 法人益田市・まちおこしの会”は一般市民に対してスポーツ、学術、文化、芸術を通して子供の健全育成と地域復興に寄与することを目的としている。地域を活性化するために、3-2で述べたような観光資源に加え、益田市ならではの良い点、車が少なく、信号が少なく、海から山への美観、道路幅も広く整備されているため、都会の自転車乗りには羨ましい環境であると考えた。これらの要素、自然、特産物、文化、自転車を売りに、全国300万のスポーツサイクリストへ益田の名前を発信している。

益田市・町おこしの会では年に一度、益田市が自転車の町に変貌する一週間、サイクルウィークというイベントを実施しており、ユースキャンプではツールド・フランスを目指す将来有望選手が集結し合宿を行い、また自転車教室では基本講習、公道での講習を行う。最終日の INAKAライドでは200名に及ぶ選手、スタッフが益田市内の25km、100km、160kmのコースを走り抜ける。



写真1 INAKAライドの様子



図3 益田市中心部

サイクリングコース

### 3. サイクリスト拠点の設計計画

#### 3-1 コンセプト

NPO法人益田市・町おこしの会の取り組みをベースとし、観光産業だけでなく、市民や一般の観光客も利用できる空間、全国にいる自転車好きの人たちが注目し訪れてみたいと思える“自転車の町”を目指し、全国ユースキャンプをヒントに益田市にサイクリストが自転車に集中できる宿泊施設空間の提案を行う。

#### 3-2 敷地選定

実際にサイクリストの方々との話を通じ自転車乗りが求める環境とNPO法人の推薦するサイクルコース(図3参照)を踏まえ、蟠竜湖の畔を設計敷地とする。湖の面積は13ha、最大水深10mで、湖沼景観を主体としたレジャーの場として散策コースやボート乗り場、釣堀などがあり、地域の人々に親しまれていたが近年利用者が激減し寂れたものとなっている。蟠竜湖が地域の人々から親しまれる場として再び賑わいを持つとともに、全国の自転車乗りへ益田の名前を発信する場としてこの敷地を選定する。

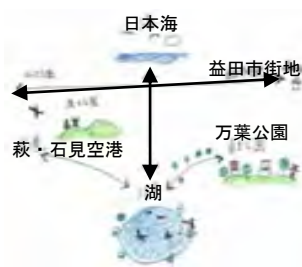


図4 湖周辺関係

図5 湖の現状



写真2 湖景観 写真3 ボート乗り場 写真4 既存ホテル

#### 3-3 ランドスケープデザインと配置計画(図6・7)

敷地には既存のホテルが水面から約14mのところにある。このホテルの宿泊機能を湖からの斜面上に配置する。湖景観を損なわないよう、サイクリストが回遊できる自転車導線と斜面に客室を配置し地形操作をした。また、石見

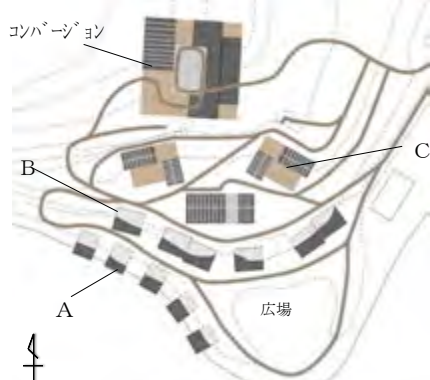


図6 配置図

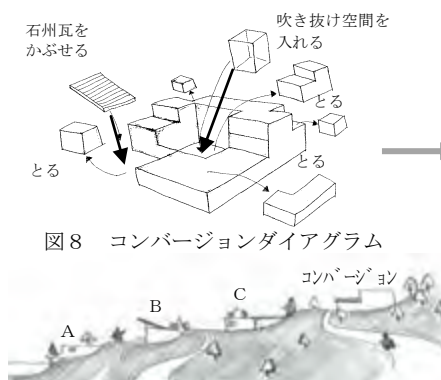


図8 コンバージョンダイアグラム

図7 敷地断面イメージスケッチ

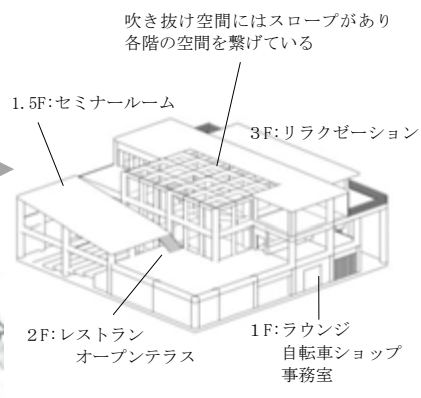


図9 コンバージョン外観

地方に見られる石州瓦を建物に取り入れることで、訪れた人々に益田市ならではの異生活を介間見てほしい。

#### 3-4 既存宿泊施設のコンバージョン(図8・9)

既存ホテルの柱を残しコンバージョンし市民やサイクリストのコミュニティの場となる複合施設とする。

#### 3-5 サイクリストをターゲットとした客室デザイン

上記で述べた客室を設計するにあたり、訪れたサイクリストが“また来たい”と思える空間を設計する。ここでは自分の自転車をそれぞれの部屋へ持ち帰り整備することができる部屋を考えた。

A) 水辺と自転車: 田舎ならではの安らぎを求める人へ向けた、レイクサイドタイプ

B) 通りと自転車: 縁側に自転車を置くことで道行く人と会話することができる、ディスプレイタイプ

C) ラウンジと自転車: 団体が宿泊する際に各々の自転車を持ち寄り談話するラウンジがある、団体宿泊タイプ

### 4. 結語

地方小都市における独自の地域資源を観光まちづくりにつなげることを目的に調査を始めた。本研究では島根県益田市では地域の誇れる資源として自転車を利用した観光まちづくりが可能であるということが明らかになった。しかし本研究を実際に地域の中に入り提案するまでには至っておらず、今後の課題にしたい。

### 謝辞

本研究を進めるに当たり、ヒアリングや資料提供を快く受け入れてくださった有限会社サイクルセンターまつしま、特定非営利活動法人益田市・町おこしの会、またお話を通じて様々な知識を頂いたサイクリストの皆様心より感謝いたします。

### 参考文献

[1]原田順子: 観光の新しい潮流と地域 財団法人 放送大学教育復興界 [2]益田市役所<http://www.city.masuda.lg.jp/> [3]島根県観光復興課<http://www.pref.shimane.lg.jp/kanko/> [4]NPO法人益田市・町おこしの会: 島根県益田市自転車による町おこしプロジェクトH. 25, 7, 26



# 宿場町の近代都市形成

— 静岡県東海道 22 宿 —

Y10029 中村 悠

指導教員 前田英寿

## 1. 研究の背景と目的

静岡県には五街道の東海道が通っている。東海道には、江戸時代に幕府が目的をもって整備した宿場が53か所あり、その宿場を中心にして商工業者が集まり形成された街を宿場町という。この宿場町が静岡県内には22か所ある。本研究で江戸時代の宿場町と近代以降の市街地や都市施設を照らし合わせることで、宿場町を起源とする近代都市の形成過程を明らかにすることを目的とする。

研究を始める前に事前学習として、日本建築学会大会建築デザイン発表梗概集を用いて「都市デザインプロジェクト」の分析を行った。

## 2. 22宿の都市形成過程

静岡県内にある三島宿～白須賀宿の22宿について分析を行った。1宿に対して、宿の概要、街の特徴、宿と駅的位置関係、市街地の変遷（明治～昭和・昭和～平成）、公共施設の立地について記している。

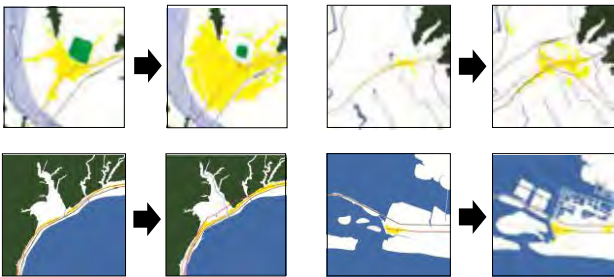


図1 明治から昭和の市街地拡大（府中宿、三島宿、由比宿、舞阪宿）

## 3. 22宿の分類と考察

前章の22宿各々の分析をもとに、宿と駅の関係、明治から昭和にかけての市街地拡大、バイパス・東海道と市街地の位置関係、公共施設の立地、宿場町端での旧東海道に着目して分類を行った。

(1)宿と駅の関係 宿と駅的位置関係に着目して徒歩圏内の500mを基準に22宿を①宿と駅の距離が500m未満、②宿と駅の距離が500m以上（直交方向）、③宿と駅の距離が500m以上（平行方向）、④駅の近くに宿とは別の街がある、⑤駅がない、の5つに分類した。分析の結果、宿場町と駅との距離が500m未満である宿が多かった。山中や海沿いの宿は地勢による制約を受けているところが多く、駅と宿が100～150mと近い、もしくは1～2kmと離れていた。内陸の宿は近くても駅と300～400m離れており、宿場周辺の市街地を避けて少し離れた場所に駅が設けられたと思われる。

(2)市街地の拡大 明治と昭和の地図から市街地の拡大に着目して、22宿を①広範囲拡大、②宿場町周辺で拡大、③宿場町・市役所周辺で拡大、④宿場町・駅周辺で拡大、⑤駅周辺で拡大、⑥変化なし、の6つに分類した。分析の結果、宿場町周辺で拡大、駅周辺で拡大、変化なし、と市街地拡大範囲が狭いところは地勢の影響を受けている街のみであり、宿場町都市の市街化傾向としては宿場町・駅周辺での拡大が一般的であると思われる。そして、昭和35年当方で地方中核都市の規模である街は広範囲拡大をしていると考えられる。

表1 22宿の環境・都市条件と分類結果の一覧

	環境条件				条件				宿と駅の関係					市街化拡大						
	山	海	川	城	人口(S35)	都市機能	地勢	私鉄	①	②	③	④	⑤	①	②	③	④	⑤	⑥	
①三島			○		62966	門前町	内陸	駿豆鉄道		○				○						
②沼津		○	○	○	142609	城下町・港町	海沿い	駿豆鉄道		○				○						
③原		○			15059		海沿い		○									○		
④吉原			○		80944		内陸	岳南鉄道				○						○		
⑤蒲原	○	○	△	○	18586		海沿い				○							○		
⑥由比	○	○	○		13740		海沿い				○							○		
⑦興津	○	○	○				海沿い		○									○		
⑧江尻		○	○	○	193259	港町	海沿い	静岡鉄道		○				○						
⑨府中			△	○	328819	城下町	内陸	静岡鉄道	○					○						
⑩丸子	○		○	○			山中						○		○					
⑪岡部	○		○		10248		山中						○		○					
⑫藤枝			○	○	66921	城下町	内陸	静岡鉄道		○								○		
⑬島田			○		61510		内陸		○								○			
⑭金谷	○		○	△	22683		山中	大井川本線	○						○					
⑮日坂	○		○				山中						○							○
⑯掛川			○	○	59762	城下町	内陸		○							○				
⑰袋井			○		37777		内陸	静岡鉄道		○								○		
⑱見附			○	○	57380	国府	内陸					○						○		
⑲浜松			○	○	357098	城下町	内陸	遠州鉄道	○					○						
⑳舞阪		○			9468		海沿い					○							○	
㉑新居町		○			13432	関所	海沿い					○							○	
㉒白須賀	○		○				山中						○							○

#### 4. 宿場町起源の主要都市 ー沼津・清水ー

沼津と清水は港町という共通点を持ち、前章の市街地変遷の分析において静岡や浜松のような静岡県内の大都市と同様な変化が見られたことから、この2都市の分析をさらに進めていくことにした。2都市については明治・昭和・平成と時代の経過とともに都市またはその周辺でどのような変化があるのかを分析し考察する。

(1)沼津 歴史から分析すると、沼津は港町と宿場町の機能を持ちながら、沼津城の城下町であったことが消費都市としての性格を強め、現在の商業都市につながったと考えられる。地勢・地域環境から分析すると、沼津の東には三島宿があった三島市、南に伊豆半島の町や市があり、西には原町、愛鷹山の麓には住宅地が広がっている。このように、沼津の周りには後背地が多くあり、沼津の街に人が集中したことが都市発展の要因と考えられる。

(2)清水 歴史から分析すると、江尻の街は江尻城の城下町によって商工業者の集落となっていた。その後、東海道宿場町の機能が付加され、家康が築城した駿府城の外港となることで商業都市と港町の性格が強くなっていったと考えられる。地勢・地域環境から分析すると、清水は平地で市街地が形成されやすく、海沿いの蒲原・由比・興津、「三保の松原」がある三保半島、清水と静岡の間の草薙地区など清水の街周辺の後背地から人々が集まるため、中心都市として発展したと思われる。



図2 明治20年の沼津中心部



図3 昭和31年の沼津中心部



図4 明治20年の沼津中心部 (広域)



図5 昭和31年の沼津中心部 (広域)

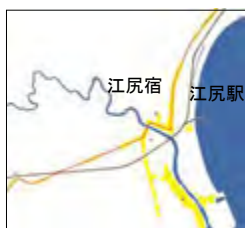


図6 明治22年の清水中心部

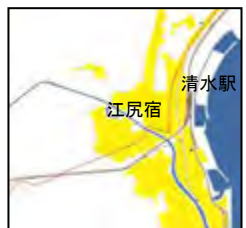


図7 昭和31年の清水中心部

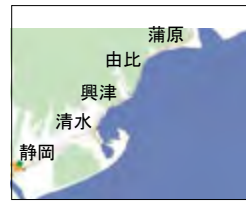


図8 明治22年の清水中心部 (広域)



図9 昭和31年の清水中心部 (広域)

#### 5. 非宿場町起源の主要都市 ー富士・焼津ー

22宿場町の比較分析対象地として富士と焼津を取り上げる。富士と焼津はJR東海道本線が通る。ともに駅がある街であるが宿場町は存在しなかった。宿場町でなかったこの2都市を取り上げ、駅が都市に与えた影響、宿場町が街の近代化に与えた影響の有無を明らかにする。

現在の富士市は製紙業が盛んである街であるが、旧富士市の加島地区はもともと農家が点在する場所であった。明治期に製紙工場が誘致されたことにより、機械製紙が広まり、駅の開業や港開設にもつながったと思われる。



図10 明治20年の富士中心部

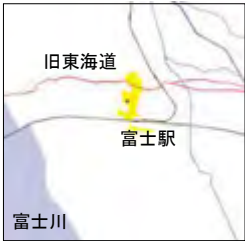


図11 昭和31年の富士中心部



図12 明治20年の富士中心部 (広域)



図13 昭和31年の富士中心部 (広域)

#### 6. 結語

宿場町起源都市は、宿場町があったことによって宿場周辺が商業地の起点となり、近代化による鉄道駅の開設、人口増加、工場誘致などの要因により、市街化を拡大させていくことができたと思われる。一方、非宿場町都市は時代による産業の発展がその都市の発展に繋がっていったと考えられる。

#### 参考文献

- [1] 塩見寛：まちの個性を、どう読み解くか、静岡新聞社、2001年
- [2] 塩見寛：旧宿場町における計画意図の解明と継承に関する研究、東京大学博士論文、2012年
- [3] 小杉達：東海道歴史散歩、静岡新聞社、1992年



# 門前町のユースホステル

-富山県南砺市井波地区-

Y10036 本多 由香利

指導教員 前田 英寿

## 1. 研究の背景と目的

富山県南砺市は近年過疎化が進み、大幅に人口が減少している(南砺市全体平成12年60,182人→平成22年54,724人で9.1%減少)。対象地域の南砺市井波地区は全国有数の彫刻産業地で街の至る所に彫刻を扱う店が点在している。しかし、近年は伝統的な彫刻産業も衰退の一途をたどっている。そこで南砺市井波地区を活性化させるプロジェクトを提案する。対象敷地は井波地区にある古い神社とその住宅である。これをユースホステルにコンバージョンすると仮定する。近年日本ではグローバル化が叫ばれ、外国人との文化交流がより重要となっている。しかし、地方都市ではそのような機会を得られる場所が不足している。そこで日本の文化を知ってもらい、地域の人との交流ができる外国人バックパッカー向けのユースホステルを創ることで街の活性化をはかる。



図1 富山県位置



図2 南砺市位置

## 2. コンバージョンの事例分析

2001-2013年の新建築、a+u、建築学会作品選集からコンバージョンの事例をダイアグラムと共に分析した。露崎裕也と共同で行った。

表1 コンバージョン事例分類

2-1 国内事例(木造) 2-1-1“中庭を挟んだ住まい” 住み継ぐ家 2-1-2“導線処理により民家から歴史文化資料館へ” 上下町歴史文化資料館 2-1-3“ここにしかない映画館” 鶴岡まちなかキネマ 2-1-4“窓枠のあり方” VEGA 2-1-5“芸術・文化活動と新たな情報発信の拠点” 鞆の津ミュージアム 2-1-6“再生と共生の拠点” 薬工ミュージアム
2-2 国内事例(木造以外、一部木造) 2-2-1“長屋を5つのスペースに分けてデザインする” Architecture Planet Project 黄金町エリアマネジメントセンター 2-2-2“新しい壁” 市原市水と彫刻の丘リノベーションプロジェクト 2-2-3“内部の壁を全て取り払った展示室” 犬島「家プロジェクト」 2-2-4“伊豆石を構造体として残す” 旧澤村邸改修
2-3 海外事例 2-3-1“寄生生物” パラサイト 2-3-2“カラフルな天窗” スカイライト 2-3-3“中庭に異物を置く” アンサルドの「文化の町」 2-3-4“保存された木造架構を鑑賞” 旧製粉町工場 2-3-5“新しい環境に変えた建築” ジルヴェルヴルート 2-3-6“元々の壁と新しいファサードの融合” イベリア現代美術センター

2-1-4“窓枠のあり方” VEGAは富山市福沢地区コミュニティセンターに隣接する築70年の納屋を既存の壁と柱をできるだけ残して改修している。椅子になる窓枠が特徴で、光を取り入れ空を望める文机としての場が出来ている。

2-3-5“新しい環境に変えた建築” ジルヴェルヴルートは、60年代に建てられたアパートであり、オランダ人は去っていき代わりにインドネシア人、スリナム人、マルク人などが入った。今回のプロジェクトの特徴は高密なミクストコース、店舗の導入、地区交流センター、オープンスクール、人種の異なる住人同士を混ぜることである。屋根はフラットルーフの上はかなり大きなユニットを載せている。

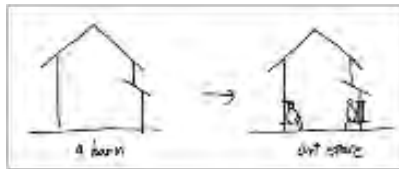


図3 2-1-4 ダイアグラム

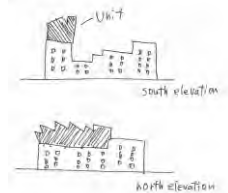


図4 2-3-5ダイアグラム

## 3. ユースホステルの調査

### 3-1 ユースホステルについて

ユースホステルは、ドイツの小学校教師リヒャルト・シルマンが創設した、青少年少女の旅に安全かつ安価な宿泊場所を提供しようという主旨で始まった運動と、それにより生まれた宿泊施設の世界的なシステムである。その歴史は100年以上になり、約80の国と地域に4000か所以上の宿泊施設があり、日本には北海道から沖縄まで約220か所のユースホステルがある。日本のユースホステルの宿泊料金は3,000円前後(会員料金、素泊り)が主流である。

### 3-2 ユースホステルの視察

ランス(2013/9/13)は見学、カンボジア(2013/6/27, 28)とタイ(2013/6/26, 30)にはバックパックで行き、実際にユースホステルに泊まり体感した。

イエローゲストハウスは、カンボジアのシュリムアップからトゥクトゥクで5分ほどの所にある。室内は清潔で部屋にはシャワーとトイレが付いている。談話室で他の旅行者と仲良くなり、次の日はその皆で観光をした。このような出会いの場ともなるユースホステルは魅力的である。

nut2はタイのカオサンロード(バックパッカーの聖地)から徒歩5分ほどの所にある。一泊500円ほどで泊まれた。

安い分、部屋は簡素できれいとは言えなかったが、PCルームなどがあり、ネット関係は充実していた。カオサンロードは外国人で埋め尽くされており、逆にタイの人が外国人と交流を持つために足を運んでいた。



写真1 イエローゲストハウス部屋、宿泊室

写真2 タイのカオサンロード

## 4. ユースホステルの設計

### 4-1 南砺市井波地区の概要

南砺市の人口は54,698人、その内井波地区(旧井波町)の人口は約11000人である(平成25年)。南砺市は平成16年に8つの町村が合併した。井波地区は散居村で名高い砺波平野の南端に位置し、八乙女山の山麓に抱かれる。1390年本願寺5代門主綽如上人が、この地に瑞泉寺を建立されたことに始まる一向宗の門前町である。瑞泉寺再建に発した「井波彫刻」は欄間・獅子頭・天神様などの伝統工芸を生み出し、全国有数の彫刻産地となった。

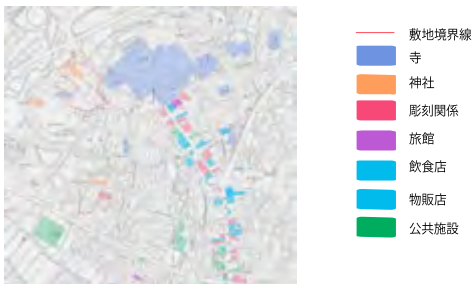


図5 井波地区の空間資源

### 4-2 計画対象地

瑞泉寺に隣接する井波八幡宮の境内を対象とする。境内は社殿、社務所、住宅、蔵、御神輿倉庫がある。住宅、倉御輿倉庫を使ってユースホステルにする。

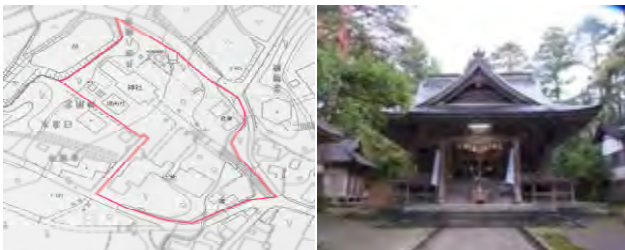


図6 境内配置図

写真3 神社正面



写真4 住宅外観

写真5 住宅内観

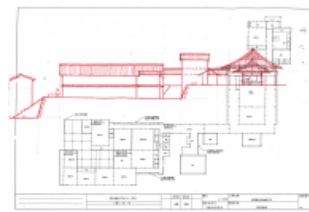


図7 住宅現状2階平面図・立面図

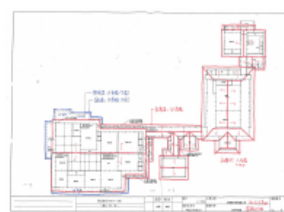


図8 住宅現状屋根伏図

### 4-3 課題と方針

#### 課題

- ①住宅には住み手がいない。老朽化し耐震性に問題がある。
- ②井波地区には彫刻や歴史の魅力があるが、井波地区及び周辺には滞在施設が不足している。
- ③地区内外ともに交流の場や機会が不足している。

#### 方針

住宅をユースホステルにコンバージョンし外国人バックパッカーに日本文化というものを味わいながら宿泊してもらおう。神社境内の手前までを設計し、地域の人との異文化交流の場にする。地形の段差を利用して目線と目線で繋ぐ。

### 4-4 設計計画

- ①住宅を宿泊施設に転用する。
- ②御輿倉庫を玄関、受付に改築する。
- ③住宅北側の倉庫と庭を交流の場にする。
- ④住宅の庭端側に浴室棟を増築する。



図9 設計プラン

写真6 イメージ模型

## 5. 結語

神社境内をバックパッカーの場として変え、地元の人達との交流が生まれる。今後の展望として、外国人バックパッカーは彫刻や神社の参拝など色々な文化に触れ、それを自国へ発信して欲しい。

### 参考文献

- [1] 新建築 (2001-2013)
- [2] a+u (2001-2013)
- [3] 建築学会作品選集 (2001-2013)
- [4] 南砺市ホームページ、  
<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp>
- [5] 千秋謙治：井波八幡宮の由来と祭り(井波八幡宮史刊行会、2002年)
- [6] 千秋謙治：井波・歴史のうねり六〇〇年(井波町立図書館友会、1990年)



# 東京都心運河沿いの土地利用と建築

## —京浜運河沿い街区を事例に—

Y10037 眞崎琢也

指導教員 前田英寿

### 1 研究の背景と目的

世界の主要都市では古くから水辺空間を重視し、魅力的な空間を創出している。東京都心の水辺空間は水運の衰退以降は裏に扱われ、人々を惹きつけるに至っていない。近年、河川使用の規制緩和や2020年の東京オリンピック決定により、都心の水辺空間は多くの可能性を秘めている。本研究は新旧の建物や空間が混じり合う京浜運河沿い街区(図1)を事例に魅力的な水辺利用のあり方を考える。



図1 京浜運河沿い調査街区

### 2 京浜運河沿いの土地利用と建築調査と分析

#### 1) 調査

京浜運河沿いを街区ごとに街区データ(用途地域、街区面積)建物データ(建物の用途、階数、築年数、構造)を調査しデータシートを作成した(図2)。



#### 2) 分析

##### ・芝浦地区(芝浦運河、新芝運河、高浜西運河)

芝浦アイランドのような大規模集合住宅が増えつつある。これら新築のマンションは水辺側にバルコニーがある等親水的な意識が見られる。一方で画地の規模が小さいため建替えが進まない建物も多くある。田町駅周辺は人通りが多くある飲食店は賑わいがあるが水辺を利用している建物は少ない。

##### ・海岸通り(芝浦運河)

四方が運河や海に囲まれている地区で対岸の芝浦地区と印象が異なる。目の前に高架道路があるため暗い。そのため住宅は少なく倉庫や企業の事務所、工場等が多く立地している。

##### ・港南地区(高浜運河、品川浦舟溜まり、天王洲運河)

ほぼ全域が埋め立てによってできている。平成15年に東海道新幹線品川駅が始業し、大手企業を含むオフィスビルや高層集合住宅が立地し始めている。天王洲運河沿いは倉庫群を大規模再開発「天王洲アイル」に再開発した。東京都が水辺を観光資源として活用する運河ルネサンスという規制緩和の枠組みを用い水上レストランが実現した。

奥行(m)	間口(m)	街区面積(奥行×間口㎡)	用途地域	建築年	築年数
22	253	5566	工業地域	85%	40%
用途		構造	階数	築年数	
1	オフィス	RC造	10	昭和37年5月竣工	
2	住宅	RC造	5	平成17年2月竣工	
3	オフィス	RC造	7	昭和32年3月竣工	
4	住宅	RC造	7	昭和31年4月竣工	
5	オフィス	RC造	8	昭和33年1月竣工	
6	オフィス	RC造	5	昭和28年12月竣工	
7	飲食店	RC造	5		
8	1階飲食店 2~5階オフィス	RC造	5	昭和28年竣工	
9	オフィス	RC造	6		
10	オフィス	RC造	6		
11	オフィス	RC造	7	昭和42年3月竣工	
12	オフィス	RC造	8		
13	オフィス	RC造	7	昭和36年竣工	
14	オフィス	RC造	5	昭和26年7月竣工	

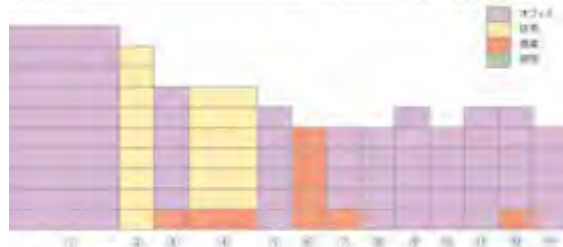


図2 データシート(新芝運河 街区4)

### 3 事例調査による魅力的な水辺空間を生む要素

#### 1) 土地利用（外構）

水辺に近接する遊歩道、護岸を整備し人が水辺に行きやすく賑わいや憩いの場となる空間にする工夫がされている。歩行者と自転車のネットワークの整備を行い散歩やジョギングをしやすくする。広いオープンスペース、公園や植栽を植えた緑豊かな空間にする。階段や段差が多様な活用を生む。

#### 2) 建築

地域の特性をもつ歴史的な建築物は保全または復元され水辺と共に資源として活用されている。水辺を意識した外装、デザインや高さの統一を図る。また水辺側にオープンテラスや河川を眺望できる空間を設ける。

#### 3) 水辺利用

水辺の水質改善、向上や水運を利用することで人々を惹きつける事例が多くある。生態系を確保し自然との安らぎを感じられる。船着場を整備し舟運、観光船を利用したイベントを行う。



写真1 小野川



写真2 サンアントニオ川

### 4 運河沿いの土地利用と建築の提案

#### 1) 設計対象地

京浜運河から新芝運河沿い街区に設計対象地を設定した（図3、図6）。対象地は田町駅に近くオフィスビル、マンションや飲食店が建ち並び人通りの多い街区である。対象敷地を含む芝浦港南周辺地区は「港区まちづくりマスタープラン」で現在土地利用の転換が急速に進み、従来から住んでいる人に加え新たに住み始めた人も加えたコミュニティの形成を促進すること。またその土地利用転換や水辺空間づくりでは多くの人々が住み、働き、訪れたい魅力があるまちづくりを行うことを基本方針として進めている。



図3 設計対象地 街区立面図（運河側）



写真3 設計対象地①



写真4 設計対象地②

#### 2) 設計計画

街区の一部を新築・コンバージョンし、既存の建築を含めて運河側に人々を惹きつける計画を行う。現在住んでいる周辺住民、オフィスワーカーや学生に加え新たに安らぎや賑わいを求めに訪れたいコミュニティ空間を設計する。

対象地の建築A及びEは同時にオフィスビルを設計するとし、遊歩道を含めたコの字型の対象敷地で運河に人々を惹きつける計画をする。建築Bは空き倉庫になっている1、2階をコンバージョンする。それぞれの低層階は公共空間（ブックカフェ）とし、遊歩道に屋根を設けることで建築間の移動を可能にさせ運河側に人の流れを生む。低層階で飲食店を営んでいる建築C及び建築Dは既存のままとし、運河側にオープンテラスを設け運河側に商業展開できるようにする。新築の容積率は都市計画上限の400%とするが周辺環境を考慮し建築A、E間で容積移転することとした。



写真3 検討模型①



写真4 検討模型②



図6 設計対象地図

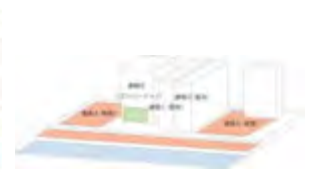


図4 設計計画



図5 用途配置

### 5 結語

本研究で京浜運河沿い街区を事例に魅力的な水辺利用のあり方を考察し、都心の運河に人々を惹きつける提案を行った。都心の水辺空間には多くの可能性があるが同時に多くの規制のため計画するにあたっての様々な問題を有している。今後、自治体の規制緩和を含め魅力的な水辺空間が多くの中で創造されることを期待する。

#### 参考文献

東京都2500デジタル/ミッドマップ東京/2012  
川からの都市再生—世界の先進事例から—/財団法人リバーフロントセンター/2008  
世界のSSD100 都市持続再生のツボ/東京大学SSUR-SSD研究会/2008  
日本河川・流域再生ネットワークHP/ <http://www.a-rr.net/jp/>  
港区基本計画芝浦港南地区版計画書/港区芝浦港南地区総合支所/2012  
港区まちづくりマスタープラン/港区/2007  
公共空間のリノベーション/馬場正尊+OpenA/2013



# 運河に面するコレクティブハウス

Y10038 真砂慎太郎  
指導教員 前田 英寿

## 1、研究の背景と目的

現在、日本では核家族化や単身世帯化など家族形態の多様化・小規模化が進行している一方で人と人との触れ合いも加速度的に減少してきている。そして個人や家族の地域からの孤立化は様々な社会問題を引き起こしている。2011年3月の東日本大震災を機に人のつながりが再認識され、コミュニティを再生する取り組みが注目されている。本研究では他者や社会とのつながりを育む一つの居住スタイルとして、個人の自立を確保しながらコミュニティの場として共用空間を備えたコレクティブハウスを設計する。

## 2、都心におけるコミュニティをめぐる問題

都心におけるコミュニティをめぐる問題に関係するキーワードを20挙げ(表1)、それらに関する建築・都市計画の対策、提案の事例を調査した。高齢者については、親族・地域関係が希薄化し孤独感を抱くことや子育て時に購入した住宅が多いなどの問題が挙げられ、共同のリビングやキッチンなどを有し若者から高齢者まで様々な世代が共住するコ・ハウジングという居住形態があり、コミュニティの結びつきの度合いは様々であるものの、共同の食事会、会議、趣味の活動などが展開されている。

表1 コミュニティに関わるキーワード

歴史／祭り／観光／観光まちづくり／地域ブランド／農／生物／公園／水／政治／高齢者／公共交通／買物弱者／医療／若者／大学生／密集市街地／防犯／人口／ロジスティクス
--

## 3、事例調査

コレクティブハウスを含めた「共同住宅」の事例18を調査し(表2)、プライベートな空間とパブリックな空間の関係性について分類を行い、多様な共用空間のあり方や共同生活の仕方を分析した。表3は玄関、トイレ、バス、キッチン、洗濯室と主要な5つの機能を挙げ、これらの有無によって個室完結型と共用部依存型に分け、それを更に4段階に分類した個室機能分類(表4)と個室主体か共用部主体かで分類した共用部機能分類(表5)を対応させて作成した。



写真1 YKK 黒部寮



写真2 コレクティブハウス聖蹟

表2 事例一覧

名称	戸数	住居形態
かんかん森	28	コレクティブハウス
果鴨	11	コレクティブハウス
聖蹟	20	コレクティブハウス
大泉学園	13	コレクティブハウス
マージュ西国分寺	9	共同住宅/店舗
ヨコハマアパートメント	4	共同住宅
高島平の集合住宅	14	共同住宅/店舗
再春館製菓女子寮	20	単身寮
森山低	6	共同住宅
SHAREyaraicho	7	シェアハウス
LT城西	13	シェアハウス
ゆいま〜る那須	70	共同住宅(シルバー)
コルテ松波	22	共同住宅(単身寮)
久が原のゲストハウス	10	共同住宅
YKK 黒部寮	100	単身寮
フレスタバック	26	コレクティブハウス
ゾードラステーション	63	コレクティブハウス
ショーホーデン	46	コレクティブハウス

表3 個室-共用部機能分類

個室機能	個室完結型		共用部依存型	
	A 完結	B 一部完結	C 半依存	D 完全依存
個室主体	a 不備	森山低		
	b 付加	ヨコハマアパートメント	コルテ松波	久が原のゲストハウス
共用部主体	c 充実	ゆいま〜る那須	マージュ西国分寺 かんかん森 聖蹟 大泉学園 フレスタバック ゾードラステーション ショーホーデン	高島平の集合住宅
	d 完備			YKK 黒部寮 再春館製菓女子寮 SHAREyaraicho LT城西

☐個室完結-個室主体型

個室での生活が尊重され、共用部の付加により生活を共有する可能性がある。

☐個室完結-共用部主体型

個室か共用部が選択性が強く、コミュニティが意識される。

☐共用部依存-個室主体型

適度な距離感と支えあいが生まれると考えられる。

☐共用部依存-共用部主体型

生活が共同化され共用部が中心的存在を占めている。

表4 個室機能分類

個室完結型	
個室内に機能が多く備わり生活が完結している	
A 完結	B 一部依存
個室内に完全に機能が備わっている	洗濯場だけ共有している
共用部依存型	
個室に備わる機能が少なく、共用部で補っている	
C 半依存	D 完全依存
個室機能のいくつかが欠けている	個室に機能を全く持たない

表5 共用部機能分類

個室主体型	
共用部の機能が2つ以下のもの	
a 不備	b 付加
動線以外の共用部がない	共用部機能により生活を補うことができる
共用部主体型	
共用部の機能が3つ以上のもの	
c 充実	d 完備
積極的に共用部機能が備えられている	全ての機能が共用部に備わっている



#### 4、コレクティブハウスの設計

##### (1) 対象地

東京都港区芝浦の京浜運河から新芝運河沿いに1969年築の高層住宅がある一面を敷地に仮定した(図1)。芝浦地区は運河の多い埋立地であり、工場やオフィス、倉庫などの商工業施設が大半を占め、田町駅芝浦口周辺を中心に商店街・飲食店街がある。最近は、再開発によってマンションが増えている。設計敷地の面積は約1,800㎡であり、運河をはさんだ対岸でも大規模な再開発が進んでいる。



図1 敷地周辺図



写真3 設計敷地と前面運河

##### (2) 設計計画

日常生活の一部を共同化するためのコモンスペースを設け、各住戸が独立し個人のプライバシーを守りつつも多様な居住者とお互いを助け合うことのできる多世代型コレクティブハウスへの建て替えを計画する。14棟の独立した建物ユニットをスラブでつなぎ、全ての個室から水辺を感じられる配置とした。1階部分はカフェ、銭湯、貸スペースなどを設け、地域にも開放した。2階より上は居住者専用とし3層ごとにコモンリビング・キッチン・ダイニングを配置し、各階には図書スペース、キッズスペース、フリースペース、ランドリーなどのコモンスペースを点在させた。住戸面積は20、40、60㎡の3タイプとし、3～5戸単位で1つのまとまりをつくり各個室の延長として利用できるセミパブリックスペースを設けた。



図2 1階平面図兼配置図



図3 2階平面図



図4 3階平面図



図5 立面図(運河側)



図6 水辺を感じられる配置

#### 5、結語

本研究を通して、コミュニティを意識した居住スタイルについて考察し共用部によって人との距離感を選択できる環境を創造することが重要であると分かった。今後、コレクティブハウスがコミュニティを再生する取り組みのひとつとして注目されることを期待する。

#### 参考文献

- [1] 新建築 (1991年～2013年)
- [2] 新建築住宅特集1994年
- [3] 第3の住まい コレクティブハウジングのすべて
- [4] 都市計画 (1997年～2009年)
- [5] 港区HP

# 市民推薦による景観資源の傾向と分布

—せたがや地域風景資産を事例に—

Y10045 若林 亮

指導教員 前田英寿教授

## 1. 研究の背景と目的

住宅が建ち並ぶ住宅市街地の中にも歴史的・自然的な景観資源はある。市民がそれぞれ選ぶ(思う)景観資源にどんな傾向があり、どんな場所が好まれるのかを明らかにする。本研究では都市デザイン行政で名高い東京都世田谷区を取り上げて、そこで選ばれた地域風景資産を通して住宅市街地における景観資源のあり方を考える。

## 2. せたがや地域風景資産の傾向

### 2.1 地域風景資産とは

平成 11 年に施行された世田谷区風景づくり条例に基づいて公募によって選定される風景資産である。平成 14 年に第 1 回目の選定が行われ 36 ヶ所、平成 20 年に第 2 回目の選定が行われ 30 ヶ所の地域風景資産が選ばれており、現在は、計 66 ヶ所の地域風景資産のもとで、地域の区民等による風景づくり活動が行われている。

### 2.2 地域風景資産の分類

#### 2.2.1 世田谷の分類

第 1 回及び第 2 回は 7 つに分類されている。

- ①道の風景：人と人の出会いを育む道を舞台とした地域の取り組み。例)若林 3 丁目緑の緑道
- ②並木の風景：住宅地の四季を彩る並木の風景を守り育てる地域の取り組み。例)四季の移ろいに心ときめく安らぎの道「櫻並木と呑川緑道公園
- ③水辺の風景：町に潤いをもたらす水辺からはじまる地域の取り組み。例)仙川・川面に映る桜並木道
- ④建物の風景：歴史を今に伝える建物を守り育てる地域の取り組み。例)登録有形文化財の萩原邸
- ⑤ランドマークの風景：町にシンボルとなる風景を活かした地域の取り組み。例)代田の丘の 61 号鉄塔
- ⑥水と緑の風景軸の風景：「世田谷区の緑の生命線」国分寺崖線境界を守り育てる様々な地域の取り組み。例)喜多見ふれあい広場から見た「野川と国分寺崖線の纏まった緑
- ⑦暮らしの中のみどりの風景：みどりある身近な環境を大切にす地域の取り組み。例)三宿の森緑地

#### 2.2.2 都市デザインの観点による地域風景資産の再分類

都市デザインの観点により地域風景資産の分類分けを 13 項目に細分化してみた。

##### (1) オープンスペース系

- ・緑道：桜並木やイチョウ並木などの並木、車が入れないような小道。
- ・緑地：自然林や竹林など、まとまった緑、面的な緑。
- ・シンボルツリー：1 本の木を中心としたもの。
- ・公園：広場、プレパークなど。

##### (2) 建築物系

- ・社寺：参道や寺社界限など。
- ・個人宅：住宅の中で公開されていないもの。
- ・インフラ：橋や鉄塔など。
- ・公共施設

##### (3) 暮らし系

- ・農業：畑や原風景など
- ・街並み：商店街や世田谷線界限などの通り。
- ・地区：街並みの面的な広がりのあるもの。
- ・活動：地域住民の活動がメインのもの。

##### (4) 眺め

- ・眺望：場所ではなく眺めのもの。

## 2.3. 世田谷区の分類と都市デザイン的再分類の比較

- ・世田谷区の分類では、建物の風景としか分類分けされていないが、都市デザインの観点で分類分けした場合、インフラや個人宅、地区といったように分けることができる。
- ・道の風景の分類の中にも、桜や草花の緑道や参道、商店街といろいろなパターンがあることがわかる。
- ・第 1 回に比べて第 2 回に地域の活動が伴うものが多くあり、住民の活動を重視して選定が行われたことがわかる。

## 3. せたがや地域風景資産とせたがや百景の分布

地域風景資産と百景の分布を世田谷区の地形や歴史に照らして明らかにする。

### 3.1 せたがや百景とは

昭和 59 年世田谷区によって発案され、区民に「好ましい風景」を推薦してもらい、それを委員会で整理、選別し、最終的に区民の投票によって決まった 100 の風景資産である。

### 3.2 世田谷区の地形的特徴

世田谷の原風景の基盤となった武蔵野台地固有の地形は、国分寺崖線に代表される斜面地や坂道、さらには高台からの眺望、高台にある住宅地や商店街、さらに公園や緑地にみられる起伏などの風景に読みとることができる。

#### 3.2.1 古道 (図 1)

- ・大山道・甲州街道・青山道(滝坂道)・登戸道・鎌倉道

#### 3.2.2 緑道 (図 2)

- ・北沢川緑道・烏山川緑道・蛇崩川緑道・呑川緑道
- ・九品仏川緑道

#### 3.2.3 河川 (図 3)

- ・野川・仙川・谷沢川・丸子川・多摩川

#### 3.2.4 崖線 (図 4)

- ・国分寺崖線・立川崖線

